

裏切りの代紋（中編 3 号涙編）

遅い朝食

明け方近くまで元目高組の女達を相手に嗜虐の宴を満喫した村崎會の面々は、昼近くまで眠りこけ、今ようやく遅い朝の食事を摂ろうとしている所であった。

昨日剛沢の村崎會加入の宴席が設けられた広い畳敷きの宴会場に膳部が並べられ、皆寝乱れた浴衣の上に丹前を羽織っただけで、めいめいの前に設えられた膳に向かって腰を降ろしていた。

それぞれの男達の隣には大亜門戸会お抱えの娼婦達が侍り、宴席のコンパニオンの様に男達に酒を注いだり肴を口に運んだりしていた。

酒好きの男達ばかりなので、昨晩は深夜まで浴びる程、酒をあおったというのに、朝っぱらから目の前に出された酒を昨晩の乱雑気騒ぎを思い出して、その時の感激を酒の肴にするように口角泡を飛ばして笑いさざめきながら、楽しそうに喉に流し込んでいた。

剛沢も型通りの朝の挨拶を済ますと早々に姿を消してしまい、後には気心の知れた古くからの仲間内だけになったため、男達は気兼ねなく大声で談笑していた。

男達は昨夜自分達全員で肉体を貪ったお竜の体が如何に優れたものであったかを、嬉しそうに笑い声を発しながら大声を上げて評していた。

上座に陣取った村崎も、昨晩の晴江達母娘との激しい情交を思い出すのかニコニコと笑みを浮かべながら酒を口に運んでいた。

村崎の両脇には全裸の若い娼婦が腰を降ろし、惜しげも無く雪白のしなやかな裸体を老獺な肥満男の目に晒しながら、左右から交互に酒やツマミを村崎の口に運んでいた。

村崎の左右に居並ぶ男達一人一人の隣にも全裸の女達が^{しなだ}撓垂れるように座って男達にお酌をしたりしていた。

全裸で男達の相手をする女達は全員大亜門戸会のお抱えの娼婦であり、本日の村崎會幹部の饗応のため売春宿から連れ出して来た女達であった。

その中には元々は目高組の娼婦であったが、目高組が大亜門戸会の前にあっさりと敗北し、縄張り一切と全財産を奪い取られた為、そのまま売春施設ごと大亜門戸会の持ち物となり、主は代わってもお抱えの売春婦であることには変化無く、以前の通り客を取ることを強制さ

れている女達も大勢混じっていた。

明日への希望も無いまま連日の荒淫にやつれた女達の容貌は、晴江と暁美の母娘やお竜達と比べると数段落ちるものではあったが、それでも剛沢が手持ちの娼婦の中から選り抜いた女達であったので、酒と女には目がない村崎會の幹部連中も、次々と酒を注がれる内に、良い気分になって来て、酒を口に運びながら隣に座る女の剥き出しの胸や股間に手をやって女達に甘い悲鳴を上げさせるのであった。

この元目高組の娼婦上がりの女達のほとんどは、自分達を人間扱いせず生き血を搾り上げるように酷使して来た目高組の人間に深い恨みを持っており、男達の酒飲み話から高慢に振る舞っていた目高組のトップに居た女達が、今やどんな境遇に墜とされ、どんなに悲惨な状況で身をひさいでいるのか知ることが出来、胸のつかえが一機に下りたような気分となり、無骨な男達の手で素肌を撫で回されながらも、ガラガラする眼で上機嫌の男達の話題に聞き耳を立て、自分が給仕する男に酒を勧めながら、更に現在の大姐達の惨めな境遇を根掘り葉掘り話を聞き出そうとするのであった。

村崎會の男達への接待に駆り出された売春婦の中には、あの麗夜も混じっていた。

ほんの三ヶ月程前に、繁華街で遊んでいる所を目高組の男達に騙されて、娼婦に突き落とされてしまった少女であったが、毎日男達に体を蹂躪され続ける内に、清純な少女としての純真さはすっかり失われ、今は荒廃した精神の空虚さを獣欲に飢えた客から食う様に抱かれる時に与えられる肉欲により満たされることを唯一の生きる糧としているかのように自分の方から積極的に男にしな垂れ掛け女として開花し始めた身体を切り売りする毎日であった。

隣に座った酒臭い男から、しっとり指に吸い付く様な甘美な脂肪を溜め始め、年の割に成熟した、たわわな乳房を撫でられると思わず乳首を硬直させ、股間をまさぐられると何かを期待するようにジットリと秘裂を濡らすのであった。

男達の目の前の膳には前菜に続いて、焙烙に載せられた小振りの鉄鍋が運ばれて来た。

黒い鋳物の鉄鍋の中では、高級な霜降り牛肉が旨そうな匂いを立てながらグツグツと音を立って煮込まれていた。

「ほう、朝っぱらからすき焼きとは、豪気じゃないか。」

一人の男が、朝食から脂肪をたっぷり含んだ肉料理を供されたことに驚いたように声を上げた。

これに対して、隣の男が口を挟んだ。

「何言ってやがる！朝じゃなくてももう昼だろう！昨晚も明け方まで散々お竜姐御とやって体力を使い果たしたって言うのに、今日もこれから晴江姐さん達のお相手をしなければならぬいんだぜ！肉でもたらふく食って精を付けなきゃ、身体が持たないぜ！」

「そうだ！そうだ！俺も昨日お竜姐さんと思い切りやって、未だに腰がフラフラだぜ。旨い物を腹一杯食って、早く体力を回復させないとな！」

と、良く冷えたビールを口に運びながら大きな笑い声を上げた。

昨日村崎の供をして此处を訪れた時には、かつての兄弟分の妻や娘や良く見知っているお竜に同情の気持ちを寄せた者も多くいたが、三人の女の男の本能を誘う蠱惑的な姿を目の当たりにして、娼婦に転落させられ女達の媚肉を実際に堪能すると、かつての義兄弟の女を凌辱するという罪悪感は綺麗に心の片隅に片付けられ、今となっては、食欲に更にあの甘美な女肉から痺れるような快感を搾り取ろうとする背徳的な欲望に心が動かされるのであった。かつては義兄弟のものであり手の触れることの出来なかった女達は、いまや自由に食う事の出来る皿の上に載せられた美味なご馳走であった。

その間にも、銀子も手伝って剛沢の女達が、料理の膳を村崎會の男達の前に運んだ。

銀子や剛沢の愛人たちの男好きのする美貌に男達は食指をそそられたが、いくら酔っているからと言って、昨日義兄弟の杯を交わしたばかりの男の愛人に手を出すことは気後れして、その代償を求める様に隣に待る娼婦の生肉に指をはわせた。

淫欲に濁った眼をした男から隠し処をまさぐられ、女が甘い声を発した。

女達も恨みを込めて見ていた大姐達の現状を上機嫌で声高に喋る男達にサービスしながら根ほり葉ほり聞き出し、男達が自慢するように笑いながら答えるのを聞いて、その淫靡な虐待を受けている、あの高慢な女達の身悶える姿を想像すると何時しか身体が火照り出し、内奥から込み上げる肉欲を男に求める様に積極的に男の手を誘い入れるのであった。

人目もはばからず浴衣の前を開けて半立ちした肉棒を取り出すと、上機嫌で酒をあおりながら女の襟首を掴んで股間に押し付ける男もいた。

「お前は元気だな！俺は今夜に備えて触るだけで我慢しておくよ。」と、隣でいきなり女に陰物を咥えさせ始めた男を呆れたように見つめた。ただし指は女の秘裂に這わせ続け、嬌声を上げさせていた。

男達の淫乱な行為を見て見ぬふりをする女達が運ぶ膳の上では、生卵が椀の中でカチカチと

音を立て揺れていた。

すき焼きを載せた膳が各人の前に並べ終わった頃合いを見計らって、閉じた襖の向こうから「女達を連れて来ました。」と、黄原の声がした。

襖がスッと開くと、其処には一糸纏わね、透き通るような肌をした晴江、お竜、暁美が立っていた。

疲労で目の下に出来ていた隈も綺麗に化粧を施されて掻き消され、昨晚の激しい交接で乱れた髪も結び直されていたので、顔からは疲労の影は覗えなかったが、グッタリと力無く直立する女達の様子から、まだ男達から受けたダメージから回復していない雰囲気が窺えた。

目高組の女達の登場に、男達が感激して歓声を上げ、ピー、ピーと指笛を鳴らした。

歓声を上げる男達の様子に気付いて、股間に顔を埋め唇で男のモノを愛撫していた女達も股間から顔を離して襖の方を見上げた。

男達の卑猥な熱を帯びた歓声を受けて敷居の前に悄然と立ち、何も隠す物の無い裸身を晒す惨めな女達の姿を認めた娼婦達は、俄^{にわか}には信じられなかったが、そこに居るのが、かつて自分達を娼婦に貶め、暴力と恐怖で支配して、男達との性交を強要し、自分達の生き血を啜るように荒稼ぎをしていた目高組の大姐達であることを確認し、男達の禍々しい話が全て真実であったと確信すると、敵意を込めて睨み付けた。

晴江達の方でも、村崎會の男達に混じって、大亜門戸会に目高組が滅ぼされるまで、組で売春行為を強要させていた女達が座っている事に気付いて驚きの表情を浮かべた。

そして次に、女達の恨みのこもった視線を受けて恐怖に青ざめ、この間まで無慈悲に扱って来た女達に今の惨めな姿を晒すことに思わず込み上げて来た羞恥心で顔を赤くすると、前屈みに体を折り両手で股間と胸を隠した。

かつて酷使していた娼婦の前に落魄れた惨めな姿を晒すことになるとは思っても見なかったので、突然の事態に狼狽し羞恥に身を屈める女達であったが、そんな消え入りそうな表情を浮かべ身を振る女達に対して村崎會の男達から、

「何だよ！ケチ臭いな！隠すなよ！」とか

「昨日はガバッと大股開いて、ヨガリ狂ってスケベ汁を散々撒き散らしていたのに今更隠す事はないだろう！」

とか非難の声が上がった。

村崎會の男達の隣に侍る売春婦たちも男達の話聞くだけでは、あの高慢な女達の転落がにわかには信じられず、現在の大姉達の置かれている境遇に半信半疑であったが、今日の前に全裸で立たされ、羞恥に身を揉み、涙を滴らせる元目高組のトップに君臨していた女達の惨めな姿を直視すると疼く様な喜びが込み上げて来て、ギラギラする眼で見詰めるのであった。

恥ずかしそうに俯いて必死に秘所を隠そうとする女達の手を黄原が邪険に払った。

この男達の前では、逆らっても無駄であることを悟った女達は、諦めたようにオズオズと秘部を隠していた手を除けた。

広間に居並ぶ男女の好奇な目に綺麗に剃り上げられて隠す物が無い秘部が再び露わとなった。ここに連れ込まれる前にサブ達からたつぷりと時間を掛けて股間を手入れされた女達であった。

ムダ毛を一本も残すことなく念入りに剃毛されて、まるで童女のその部分の様な突き立ての餅のような艶やかな股間の様子を目敏く見付けた娼婦達から一斉に嘲りの笑い声が上がった。綺麗に剃毛されて、隠すことも出来ず、ふくよかな肉を置いた大腿の付け根に一文字にくっきり通る秘裂を晒している女達に、全裸で男達の前に引き出されているは、今の自分達と同じであっても、あの女達は女の秘め処を隠す大事な繁みまで大亜門戸会の男達に奪い取られ、媚めかしい女肉の割れ目を隠す事も禁じられている事を知ると、自分達の方が一機に優位に立った様な優越感を感じるのであった。

これまで深い憎しみを感じていた目高組の幹部の女達の惨めな姿に、歓喜が一機に爆発し、晴江達の秘部を指差しながら一々ソコの様子を大声を上げて下品な言葉で指摘しながら、身体を揺すって大笑いするのであった。

涙を流しヒステリックに嘲笑の声を上げる女達につられて男達も思わず笑い声を上げた。

「揃いも揃って三人とも見事な上付じゃないか！」

とか、

「ピチピチの上付が三人揃いやがったぜ！」

とか、剥き身の女肉を指差して、男達が調子に乗って囃し上げた。

下腹と太股が作る三角地帯には、成熟した女の豊かに脂肪を溜めた肉の小丘がこんもりと盛り上がり、それとは対照的に童女の様な一筋の亀裂を鮮やかに晒していた。

カミソリ負けをしないようにと、たつぷりと擦り込まれたクリームにより、その最も女で

ることを証明する媚めかしい部分が艶々と輝いていた。

クッキリと深く一筋の裂け目を描く柔肉の峡谷が一行に並んで野卑な男女の目の前に供されていた。

昨夜の天井の蛍光灯照明の直下に照らされた艶めかしくギラ付くどこか硬質な裸体では無く、障子を通して差し込む、やさしい朝の光を淡雪の様に白く柔らかな身体に正面から受けながら、敷居の前に佇む清楚な少女のような趣を発する女達に新たな肉欲を覚え、その女の神聖を再び木っ端みじんに破壊し自分の前にひれ伏せさせたいという凶暴な欲望がムラムラと込み上がって来て、ケチケチせずにもっと股を拡げて良く見せろとか愚劣な声をあげるのであった。

女達の背後に立った黄原が、男達の歓声に応えるように、羞恥に身悶える女達の尻を叩いて股を拡げさせた。

そして、女の両手をグイッと掴むと、恥ずかしさに思わず前を隠してしまわない様に両手を首の後ろに組ませた。

そのまま女の両肩に手を置くと力を込めて押し下げたので、両脚を大きく拡げたまま腰を落とすことになりスクワットの様な中腰の姿勢となった。

一糸纏わぬ身で、蟹股の姿勢という、女として堪えられない屈辱の姿勢のまま、秘所をグイッと前に突き出す様に強制され、羞恥の割れ目が一層鮮烈に居並ぶ男女の目の前に鮮明に現れた。

本来人に見せる筈もない禁断の谷間をこれ見よがしに見せ付ける姿勢となり、居並ぶ男女の興奮は一層掻き立てられ、血走った目でその部分に食い入った。

「マア、イヤだ！三人ともみっともない物が見えて来たじゃない！」

娼婦達が白い媚肉の割れ目から現れたピンク色した肉襞を指差して笑いこけた。

「見てみろよ！晴江姐さんの大きなお豆をよ！」

男が隣に座って快哉の声を上げる娼婦に指差して教えた。

「ホントだ！まるで空豆みたいじゃない！」

と、口を隠して目を見開いて叫ぶ様に言った。

「晴江姐さんの大きなお豆がこぼれて来たじゃないか！もっと良く見せて見ろよ！」

秘裂を隠す陰毛を剥ぎ取られ、股の付け根を大きく露出させる姿勢を取らされ、晴江の普通の女より大きなクリトリスが野卑な男女の前に露わとなった。

蟹股のまま下腹を観衆に向かって突き出ただけでも堪えられない羞恥であるのに、更に恥ずかしい部分を観衆に示す様に、黄原は自分の指を使って秘裂を開き、その奥に隠された秘孔を丸出しにする様に命じた。

奈和と義兄弟の杯を交わした男達ばかりか、これまで冷酷に扱って来た娼婦達にも女で有る事を証明する部分を自らの手で左右に押し広げ、その奥に秘蔵された淫靡な構造をさらけ出さなければならない激烈な羞恥に、涙に咽びながら激しく首を振った。

自らの指で自分の恥ずかしい部分を晒すくらいなら、両腕を縛り上げられたまま男達から無理やり押し広げられて笑い者となった方がどんなにましかと思った。

涙に咽び逡巡する女達に黄原が激しい言葉を掛けた。

「判りました！・・・元目高組の女達が、昔散々お世話になったお兄さん方に恥ずかしい所をお見せします・・・どうぞ心ゆくまでお笑いになって下さい！」

かつては厚い親交を結び、真の兄弟の様に接していた男達から土壇場に追い詰められ、捨て鉢な度胸を呼び起こされ、毒づくように口を開いた。

晴江の悲壮な言葉に背中を押され、女達は崖から身を投げる思いで、パツクリと股間を左右に開いた恥ずかしい姿のまま、自らの両手の指を左右の柔肉に添えて、幾重にも畳まれた柔らかな褌に指を掛けて捲り上げ、その深奥の羞恥の中心をさらけ出した。

その瞬間、男達からやんやの喝采が上がり娼婦達からは甲高い笑い声が上がった。

まるで熟した果実の様な柔らかな肉の狭間がパツクリと開き、その奥から可憐な肉褌を畳んだ媚肉が顔を覗かせた。

黄原の命ずるままに幾重にも畳まれた柔らかな褌を指先を使って押し開き、最奥の秘められた花園を開陳し、男を迎え入れるために用意された肉の祠まで丸見えとなった。

そこは昨夜長時間に渡って男達から突き立てられたあげく、閉じる機能も喪失し、ポツカリと表に向かって大きく口を開けたまま得体の知れない粘液を溢れさせていた場所であるが、今はそんな痕跡を微塵も残さず、ピタリと閉ざされ清楚な肉の蕾を形作っていた。

その最も隠しておきたい大切な場所に野卑なヤクザ達や敵意を含んだ娼婦達の視線が鋭く突き刺さり、秘奥がジリジリと焦がされる様な熱さを感じ、羞恥に脚がブルブルと震えた。

男達の目線に自らの秘部を在り在りと晒さねばならない屈辱の姿勢を無理矢理とらされ、晴江達は、瞼を固く閉じて目に涙を浮かべ啜り泣きながら、顔を赤く染めて顔を左右に振った。

かつての権勢を誇った女達の晒す不様な姿にその場に居合わせた男女は痺れる様な感激に酔

い痴れた。

「これは、これは、揃いも揃って見事な持ち物をお持ちじゃないか！」とか

「土手も高く、割れ口もスッと通った綺麗な割れ目じゃないか！流石は、目高組の姐御連中にふさわしい見事な貫禄じゃないか！」とか

「晴江姐さんの自慢のお豆は半分皮付きだぜ！綺麗に皮を捲ってみろ！」とか

「綺麗な色した美味しそうな穴を持っているじゃないか！」とか

晴江達の裸身に、うっとりとした男達が、その様子を評して口々に好きなことを囁き立てた。

今は大亜門戸会の娼婦となった女達も、これまでの晴江達に対する恨みを晴らすのは今とばかり、男達に混じって童女のような剥き出しになった秘部の滑稽な様子を見詰めながら、指をさして笑いこけ卑猥な言葉で、その有様を罵った。

晴江達は全身を羞恥に赤く染め唇を噛みしめて、かつて自分達が犬猫以下の扱いで酷使していた売春婦達の罵詈雑言を俯きながら受けていた。

ヒステリックな声を上げて、口々に猥褻な言葉を投げ付ける娼婦達は、目高組の大姐達が大亜門戸会の手落ち、自分達と同じ、いやそれ以下の最低の娼婦に墜とされた事を男達の話から聞いたが、今実際にその事実を目にして一機に溜飲が下がる思いとなっていた。

女として耐え難い屈辱の姿勢をとられ、隠す物の無い秘所を野卑な男女の視線に赤ら様に晒し、卑猥な野次を受け続けたのは時間としてはそれ程長く無かったかも知れないが、晴江達三人にとっては永遠に続く長い苦痛の時間に感じられた。

「ほら、何時までもボサッと突っ立てないで、言われた通りするのよ！」

銀子が邪険に晴江の手を掴むと男達の宴席の中に引き出した。

銀子に手を引かれるままに村崎の前に進み出た晴江は畳の上に正座して、村崎に向かって両手を付き深々と頭を下げながら、「お早う御座います。・昨夜は良く眠れましたでしょうか？」と、たずねた。

「おうおう、あんたら親子を両側にして川の字に寝かせてもろうて、お陰さんで良う眠らせて貰いましたで・・」

布団の両側に後ろ手に縛り上げた全裸のままの晴江と暁美を並べその間に寝て、母娘のしっとりとした柔らかな身体に密着させながら、両手で二人の秘所を遊んでいる内に寝落ちした事を思い出しながら相好を崩して応えた。

「私たち母娘の拙い身体を充分に楽しめましたでしょうか？・・・」と、目に涙を溜めて、銀子から命じられた口上を述べ朝の挨拶を行った。

以前から配下の親分の妻である晴江の美貌に魅せられ、横恋慕していた村崎は昨晚晴江の身体を食った時の感激を呼び起こしたのか、満面に笑みを浮かべて、「おうおう、あんたのオメ
■も尻の孔も又とないええ味やったで！」とニコニコしながら応えた。

緩んだ口の端から涎がこぼれ落ちそうになるのを手で拭きながら、晴江の肛門がいかにも男を夢中にさせるものであるかを大声で具体的に言葉にした。

嬉しそうにそのような下劣な話を始めた村崎の前に正座したまま、目の前に座る娼婦に恥ずかしい話を聞かれる辛さに顔を赤らめて下を見詰めた。

村崎の両隣に陣取った二人の娼婦は、以前は澄ました顔をして尊大な態度を振るっていたこの憎らしい女が、前の孔だけでなく後ろの孔まで使って男に身体を提供していた事が判り、客に前の穴しか使わした事のない自分達より低俗な娼婦に墮とされた事を理解して、思わず顔を見合わせてほくそ笑んだ。

そして、嬉しそうにしゃべる村崎の言葉から肛口を貫かれて悶える晴江の姿を想像するのであった。

村崎の両隣に席を占める村崎會の中でも最高の地位を占める親分方の前にも、剛沢の愛人達に手を引かれて、お竜と暁美が正座させられ、三つ指付いて朝の挨拶をしていた。

明け方近くまで男達の暴虐の嵐に晒され、凄惨な姿を晒していた女が、もとの凛とした美しさを取り戻して目前に控えていることに驚いたように、隣に待る娼婦に昨晚仲間たちと蹂躪したお竜のその時の様子を嬉しそうに言葉にして説明していた。

その時の様子を想像しながら脇に座った娼婦が陰険な視線で見詰めていた。

村崎への屈辱的な朝の挨拶を済ませた晴江は、蔑む様な娼婦達の視線を浴びながら、恥ずかしそうに消え入りそうな声で、

「それでは、これから皆様のお食事の準備を致します。卵をお割りしますので、私のアソコにお入れ下さい・・・」

と、一言言うと、その刹那、堪えていた羞恥が奥から込み上げて来たのかポツと顔が赤く染まった。

自分の狼狽した姿を村崎に見咎められない内に、慌てて、正座の姿勢から手を突いたまま腰を持ち上げ、そのまま体をグルリと回して、村崎の方にその成熟した尻を向けた。

村崎の左右でも村崎會の幹部の前に引き立てられたお竜と暁美が男達に向かって犬のように四つん這いの姿勢とになり白い大きな尻を男に向かって突き出していた。

一瞬、エッと驚いたような表情を浮かべた村崎は、次に溢れる様な淫靡な笑みをたたえて嬉しそうに笑い声を上げると、

「あんたら、ここで卵を割って呉れると言うのかい？」

と、晴江の剥き出しの秘裂を指先で撫でながら聞いた。

極彩色の刺青が施された双臀の狭間に残された茹で卵の薄皮を剥いたような雪白の素肌を中心線上にうっすらと色素を沈着させた桃の実の様にふっくらと膨らむ肉の貝と昨晚自分が思う存分蹂躪したセピア色の菊の蕾がひっそりと息づいていた。

清楚に咲く二つの花は、昨夜激しく責め立てられ、未だに腫れが残っているように感じられた。

村崎と剛沢に同時に責め立てられ未だにジンジンと疼痛の残る秘裂を撫でられて、晴江がヒッと小さく悲鳴を上げて尻を震わせた。

「はい、・・・ソコに卵を入れて下さい・・・」

「ソコって何処や？此処か？」

村崎がワザと菫色を帯びた蕾を親指の腹で押した。

其処は昨夜何時間にも渡って村崎のモノを突き立てられ、自分自身でも知らなかった深奥の快感を表に引き吊り出され、堪らずも幾度も絶頂を極めさせられた汚辱の穴であった。

目高組の後ろ楯として、自分の義父とも頼りにしていた男から何時間にも渡ってその不潔な部分を蹂躪され、最早抵抗の気力も失せてしまった晴江は、自分に敵意の目を向ける娼婦達の目の前で再びその部分に指を埋め立てられ、責め立てられるのでは無いかと怯えてブルッと腰を震わせた。

つい数時間前まで村崎のモノを収めていた部分は、大火の残り火の様に、まだ妖しく熱を持ってジンジンと疼き続けており、今村崎から再び攻撃を受ければ、その熱く燻った燃え残りに再び火が点き、反撃も出来ず、かつて目高組で抱えていた娼婦達の目の前で落下無惨な醜態を晒してしまうことになるのでは無いかと恐れたのだった。

うめき声が上がりそうになるのを必死にかみ殺し抵抗の出来ないままの羞恥の器官に悪戯しながら、村崎の脳裏には、夜通し剛沢と二人で前後からサンドウィッチにして責め立てられ、最後は意識朦朧となりながらも二人の精液を搾り取ることに成功した直後の乱れ果てた姿が

思い浮かんだ。

際限なく絶頂の極みに押し上げられ最早気力と体力の全て奪い取られたと思っていた晴江にどうしてそんな力が残っていたのか、あるいは絶頂の果ての没我の世界を彷徨う内に神秘的な女体の本能じみた防衛本能の様な能力を目覚めさせたのか、責め立てる男達の肉棒を混濁した意識のまま最後の最後に残された力を振り絞って締め上げ、性技に長けた男達を思わず自失させる事に成功すると、貧血を起こしたのか、そのまま崩壊するように畳の上に倒れ込み、最早股を閉じる力も完全に喪失して、だらしなく股間を大きく広げたまま、今まで男達と対峙していた淫靡な二つの孔をマザマザと征服者の眼前に晒し、男の精を搾り上げる為に酷使した股間の筋肉がまだその余韻を残すかのように、青や赤の細い血管が浮かんで見える透き通る様な白い内股がピクピクと痙攣を続けていた。

全身汗塗れになり、半開きとなった口から荒い息を吐きながら、汗と男女の陰水が混じり合った粘っこい液体で、会陰やその周りを艶々と光らせ、ポツカリと開いたままの二つの孔からは、今し方、搾り上げたばかりの男の白濁した液を滴り流し、性の奴隷に完全に墜ちてしまった事を在り在りと証明する扇情的な晴江の姿――

その乱れ切った女が、一夜明けると、まるでそんな淫靡な姿が夢で在ったかの様に白い双臀の間の清楚で品の有る小菊の花弁をピッタリと閉ざしたその部分を見せ付けられると、この女体の持つ神秘性に深い感動を覚えて、その神秘の深淵を探るように指を這わせるのであった。

しっかりと全身を洗い清められて、昨夜の男と女の身体から流れ出た濃い粘液の混じり合った生臭い性臭は既に無く、銀子達からたつぷりと股間の奥深くまで擦り込まれた高価な香水の典雅な芳香がまるで可憐な花の香りのように村崎の鼻腔を刺激した。

村崎の指先で尻穴の皺を一本一本伸ばす様に撫でられ、昨晚の苦痛の思いが蘇ったのかビクッと体を縮めた。

「いえ・・・もっと下の方・・・」

と、村崎の悪戯を受けて、恥ずかしそうに小さな声で哀願した。

「ほな、此处か？」

可憐なピンクのスイトピーの様な柔らかな肉襞を押し開くと、むき出しにされた尿道孔に指先を押し当て、グリグリと擦り上げた。

「ああ・・・違います！」

村崎の意地悪な攻撃に晴江がむずかる様に尻を振りたて泣く様な声を上げた。

「ほな、何処や？ここか？」と手を腹まで伸ばして晴江の形の良い臍をまさぐった。

「アアッ！違う！」股の間を潜って伸ばした手で臍の穴の中に指を入れられ責められる苦痛に悲鳴の様な声を上げた。

「難儀なヤッチャの一！ほたら自分の口で言うてみい！」

と、指先の悪さを続けながら、晴江に恥ずかしい言葉を口にさせようとした。

老獺な大親分に翻弄される晴江の姿が可笑しくて堪らない二人の娼婦は口に手を当てながら二人の様子を見守った。

「ああ・・・意地悪・・・」と小さく呟いたが、村崎の悪戯に抗し切れず、「晴江の・・・晴江の・・・オマ・・・オ●●●に入れて下さい・・・」と、囁く様に言った。

「何や？声が小さくて良く聞こえへんだで、もう一度大きな声で言ってみい」

「アアッ・・・晴江のオ●●●の穴に入れて下さい！」

村崎の意地の悪さに焦れた様に、はっきりと大きな声を上げた。

あの怜悯な刃を連想させた熟女が、臍口を表す下品な言葉を口にした事に、二人の娼婦は目に涙を浮かべ、互いに肩を叩き合いながら腹を揺すって笑い合った。

二人の下等な娼婦の前で、大声で下劣な言葉を発してしまった事に羞恥心が込み上げて来たのか、晴江の身体は見る見る赤くなり腰がブルブル震えた。

「此所に入れて欲しいんかい？」と甘美な肉の孔の上に指を当てて聞いた。

涙を浮かべて、「はい・・・」と、肯く晴江の態度に満足した様に、そっとそのまま中指を深く沈めて指先で内部をまさぐった。

まだ腫れが残る粘膜の襞を村崎のゴツゴツした指で撫でられ、眉根を蹙め苦しそうに唇を噛みしめながら、

「・・・ソコに卵を入れて下さい」

と、惨めさの余り泣きそうな声を上げた。

村崎の両脇の娼婦達もこれから何が起きるのかと、ギラギラする目で剥き出しの晴江の秘裂を見詰め続けた。

「そんなに股座^{またぐら}がピッタリ閉じていたら、入れる物も入らんやろ！自分の手で開けてみい！」晴江の秘園は村崎に向けて充分に開いており、そのまま卵を埋め込むのに問題は無かったが、陰湿な村崎は更に晴江を黷ろうと、両手を使って、自らの秘裂を押し広げる様に命じた。

自分の親とも思っ仕えて来た村崎の目前で、夫しか知らない秘裂を見せる事だけでも耐え

難い羞恥であるのに、自分に敵意を抱く二人の下等な娼婦の敵意を込めた目にも、その女の恥ずかしい深奥を晒け出さなければならないと言う惨めさが込み上げて来た。

しかし、一分試し五分試しに自分に羞恥を掻き揚げようとする村崎の淫らな要求に神経が押し潰されそうになる苦悶の中で、何故か不可思議な快美感の様なものが心の奥底からジワジワと込み上げて来るのを感じ始めていた。

はいーと、小さく応えると尻を村崎達に向かって高く突き上げたまま、畳に顔を付けて上体を支えようと、怖ず怖ずと両手を伸ばして、鮮やかな刺青を彫り込んだ尻たぶを大きく左右に捻げその狭間の艶めかしい器官の姿をハッキリさらけ出した。

「そや！指を使ってオ●●●の奥まで開くんや！」

羞恥心と惨めさに涙ぐみながら、しなやかな細い指先で、薔薇の花弁にも似た幾重にも折り畳まれた柔らかな襞を捲り上げた。

パツクリと開いた秘園に間近まで顔を寄せて見詰める男女の息吹が外気に晒されたその部分に感じられた。

男女の卑猥な視線がその部分に集中している事を意識して、鮮やかに充血した秘部を捲り上げる白い指先がブルブルと震えていた。

両手の人差し指を自らの肉洞内に差し入れると、左右に押し広げた。

銀子達から肉体改造され、柔軟な筋肉に仕立て上げられた膣腔が奥までさらけ出された。

新鮮な赤みの魚肉の様な色彩を帯びた淫靡な洞窟の内部が見詰める男女の目にハッキリと映った。

屍肉に吸い寄せられる虫の様に無意識の内に晴江のその部分に鼻先を寄せた男女に、羞恥に赤く染まった焦げるような体温が照り付け、小穴から流れ出た濃厚な雌の匂いに脳髓が痺れるような快美感を持った。

村崎の両側に待る売春婦達の嘲り笑う声が、晴江の心をかき乱し、「ああーっ・・・見て・・・晴江の恥ずかしい穴を見て、晴江の恥ずかしいオ●●●をお笑い下さい・・・」と、ふとすると正気を失いそうになる意識の中で呟くのであった。

突き刺す様な男女の視線を其処に受けて、羞恥に身悶える晴江の下半身が赤く染まり、陰孔からツツーッと一筋の涎の様な粘液が滴り落ちた。

生唾を飲み込み、一仕切り扇情的な姿を臉に焼き付けた後、視線を瀬戸物のお椀の中の卵の方にやると、スーパーマーケットで売られている様なパック入りの安価な卵では無く、一回

りも二回りも大きな卵を剛沢が選んで来たことが判った。

卵を手にとると普通の鶏の卵と比べてズッシリと重い手応えがあった。

「ホーッ、これは地鶏の卵やな・・・」

養鶏場で量産されている殻の薄い普通の鶏の卵ではなく、地面の上に放し飼いにされた運動豊富な地鶏が、カルシウム豊富な天然の餌を啄んで産卵した固い殻を持つ特大の卵を供した剛沢の狡猾な真意を理解してニヤッと口元を歪めた。

「ほなら、いくで！」

淫靡な笑みを浮かべて、鶏卵を掴むと開け放たれたままの晴江の肉口に押し付けた。

何時もの柔らかいツルツルとしたゆで卵ではなく、堅いザラザラとした地鶏の卵の殻の感触を昨夜の荒淫により痛め付けられた秘所の敏感な粘膜に感じて、ヒッヒッと悲鳴を上げて晴江が尻を震わせた。

暴力行使者の前に抵抗する術もなく下腹をピクピクと痙攣させ、苦悶する美熟女の姿に嗜虐の情念を掻き立てられた村崎は、躊躇すること無くそのままグリグリと卵を秘孔に力いっぱい押し入れようとした。

銀子の女体調教を受けて、何時でも前技無しでも男を受け入れられる身体に改造された晴江であったが、並外れた鶏卵の大きさに思わず呻き声を上げて苦悶した。

やがて、村崎の暴力に根負けしたかのように、ハアと息を吐くと、まだ腫れの残る秘所の両側の褸が柔らかく開き始め、まるで卵を包み込むように蠢き始めた。

女体がその秘められた機能を発揮し、この大きな卵を受け入れ始めた様子に気付いた村崎は、ニヤッと口の端を歪めると、小刻みに尻を揺さぶりヒィヒィと悲鳴を漏らす晴江の女の孔に力尽くで押し入れた。

未だ充分潤滑されていない秘奥にザラザラした荒い表面の球体を埋め込まれ、瞬間、畳に置いた手を畳を掻き穿てる様に握り締め、汗を浮かべた額に眉根をグッと寄せ、ウッと小さく息をはいて唇を噛みしめた。

両隣に待る娼婦も目を見開いて息を止めその様子を見守った。

村崎が卵を掴んでいた手を離すと、ピンクの肉褸の間に白い卵が半分程埋没する姿があった。晴江が卵の大きさをヒリ付く華肉の粘膜で感じながら、ヒッヒッと小さく悲鳴を上げて尻を細かく震わせ、額に汗を浮かべながら懸命に体内に呑み込もうと藻掻いていた。

「どうしたの？何時まで遊んでいるのよ？ コの中に卵を呑み込むと言うんでしょ？早く呑み込みなさいよ！」

半ばまで体内に収めた卵を相手に苦闘する様子を村崎の両側で眺めていた以前目高組に所属していた売春婦が、村崎から返杯されたビールを口に含み、さも気持ち良さそうに哄笑しながら、邪険な声を掛けた。

女陰の肉を柔らかく溶かす前技も無いまま、乾いたままの腫れ上がった秘所に、潤滑クリームも塗られていないざらつく卵を呑み込むのは大変な作業だろうと、卵と格闘する晴江の姿を見詰めながら村崎は感じた。

それでも銀子の調教により、何時でも前技なしでも男のモノを受け入れることが出来るように調教された女体からは、何時しかヌメヌメとした潤滑の樹液の様なものが染み出し、華洞の周りの筋肉を媚めかしく蠢かせて、目玉のように体外に半分程飛び出していた卵を、ジワジワと体内に吸引し始めた。

充血して鮮やかな薔薇色に染まった秘孔の周りの襞が妖しく蠢き、輪を描くように広がった華洞の筋肉がグググッと収縮を繰り返す度に白い卵が晴江の体内に吸い込まれて行く様子をマジマジと目撃しながら、村崎の両側に陣取った女達が口を手で覆って、まるで得体の知れない軟体動物の口腔が大きな卵をジワジワと呑み込んで行く様な不気味な光景を目だけを爛々と輝かせて見詰めていた。

苦労の末、卵の最も直径の大きな部分が膣腔を通過すると、後は何の苦労も無い様にすうーと胎内に消えてしまった。

「マー！本当にお腹の中に吸い込んだわ！マー、嫌らしい！」

「そんな事して、恥ずかしく無いの？同性としてこちらの方が恥ずかしくなって来るわ！」

「少しは女の恥ってものを知ったらどうなの！？」

すっかり卵を胎内に吸引してしまい、何事も無かったかのように、ピッタリと閉ざされた会陰の様子を見詰めて女達が、蔑む様な笑い声を上げて盛んに揶揄した。

村崎の左右に席を占める親分の前でも曉美とお竜が肉洞内に大きな地鶏の卵を押し込められて、くぐもった呻き声を上げ、腰を淫靡に振りたてながら、早くも体内の卵と格闘を始めていた。

お竜や曉美の前に陣取った親分達も娼婦から酒を注がれながらイヤらしい目付きで薄笑いを浮かべながら、その卑猥な腰振りダンスを楽しそうに眺め、横に侍る娼婦は蔑んだ目でその動きを見詰めていた。

「さー、次はソコで卵を割るんでしょう？早く割りなさいよ！」

漸く卵を膣内に収めてホッと一息ついた晴江に女達が邪険に命令した。

これまで犬猫以下に扱って来た下等な売春婦から、恥ずかしい行為をまともに目撃され、その上、下卑た言葉を次々を浴びせられる辛さを身に感じながら、肉洞の筋肉を締め上げて、膣内の卵を割ろうと、下腹に力を込めた。

「まだ割れないの？早く割りなさいよ！」

顔を紅潮させ冷や汗をダラダラ流して胎内の卵と苦闘する晴江の様が、さも小気味良さそうに女達が声を掛けた。

花電車の出し物として綺麗囃や銀子達から仕込まれた調教では、何度も成功させた卵割りの芸ではあったが、その芸を成功させるためには極度に精神を集中させ、肉壁に力を込めて一機に圧力を掛けなければならなかった。

今下等な娼婦に綺麗に剃毛され隠す物も無い恥部を見詰められる羞恥心と、尻を叩かれたり抓られたり、あざ笑われながらの作業ため心が乱れてなかなか割ることが出来なかった。肉壁の圧力を集中出来ないまま、必死の思いで肉洞を蠢かせ、今や外見も気にせず激しく尻を振り立てる晴江の姿があった。

そして、同じように下等な娼婦から嘲笑されながら恥ずかしい技術を開陳するお竜と暁美も同じ様な状況に置かれていた。

普段、客の前で披露する芸に使用する養鶏場の鶏が産卵した薄い殻の卵と違って、二回りも大きく、殻の厚い地鶏の卵は、女たちの下腹の圧力に激しく抵抗して女たちを苦しめた。下腹にギュウッギュウッと力を込める度に膣内に埋め込まれた卵が繊細な華洞の襞を妖しく刺激した。

そんな体内の卵と格闘して身悶える女達に、いまや大亜門戸会の売春婦となった女達が嵩に掛かった様に陰険な態度で臨んだ。

これまで自分達を暴力と恐怖で支配し、無理矢理男の相手をさせては、無慈悲にその上前を奪って行った女達が、今は自分達以下の最低の娼婦となって、脂汗を流しながら女としての羞恥の極みの様な芸を演じている様を見て、一機に溜飲が下がる思いとなって、ヒステリックに涙を流しながら笑い転げ罵声を浴びせるのであった。

「アンタ達は、これまで乙に澄ましていたけど、本当はスケベな女だったのね！オ
の中の卵と遊んで、ダラダラとスケベ汁を垂れ流してさ！」

「ほらほら、何時まで良い気分になって汐を撒き散らしているのよ？早く割りなさいよ！」

「貴女は卵相手に良い気分に入っているかも知れないけど、親分はお腹を空かせて待ち切れないわよ！」

胎内に含んだザラザラした大きな卵に性感を掻き立てられ何時しか秘裂を愛液で濡らし始めた晴江に対して、敵意のこもった声を掛けながら、汗を浮かべた晴江の尻をピシヤリと殴打した。

「音に聞こえた晴江姐さんとも在ろう者が、卵一つ割れないの！？」

「背中中の観音様が泣くわよ！」

と、胎内に収められた卵を相手に苦悶する晴江に、これまでの恨みを晴らして、笑い泣きしながら揶揄続けるのだった

「おいおい！派手に汐ばかり噴きやがって、お前の親は鯨か？」

隣では、やはり苦悶する暁美が酒が回った男から揶揄されていた。

暁美の向かい側では、やはりお竜が肉胴内の卵を相手に苦悶していた。綺麗囃から褒められた肉の道具を持つお竜であったが、昨晚13人の男達から輪姦されたダメージは残っており、痺れたように下腹が動かないのであった。

「股ぐらに大きなお豆をおっ立ててそんなに気持ちが良いいの？」

下腹内部から込み上げる卵の激しい刺激に思わず勃起させてしまった男の子の持ち物の様な形状をした陰核を目敏く見つけられ、「男みたいにこんな物を勃起させてナンてスケベな女なんだろうね！」と、箸を手にしてそれを摘まみ上げた。

鋭敏な神経が散りばめられた剥き出しの先端部を漆塗りの端で摘ままれる痛みに悲鳴を上げた。

「こちらの方にも何か喰い絞めないと、力が入らないんじゃないの？」

と言うと、塗り箸を一本手に取って、晴江の菊花にズブリと突き刺した。

まるで晴江の苦悶を象徴するように、尻から突き出した箸が、ビクビクと淫靡にその先端を震わせていた。

まるで犬が尻尾を振っている様だーと、その様子を面白がって女達が畳を手で叩いたり、転げ回ったりして嘲笑した。

「こらこら・・・そんなに急かしたら割れるもんも割れんようになってしまうやろ・・・此処は黙って見とったらどうや？」

村崎が晴江の尻穴から箸を抜きながら言った。

村崎に窘められて女達も不承不承の表情を浮かべて静かになった。

胎内に呑み込んだ卵をその筋肉だけで割り砕こうと、自分の目の前で汗を浮かべて尻を振り立て、卵を収めた孔から愛液を滴らせながら、苦悶する女の姿を眺めるのも悪いモノでは無い。何時の間にか村崎の股間がムクムクと蠢き始めていた。

奈和親分を陰から支えて目高組を大組織に発展させた、任侠の世界では名の知られた美貌の女侠客が、女として決して人目に晒す事の出来ない恥ずかしい二つの孔を男の目の前にむき出しにして、その内部に埋め込まれた卵を割り砕こうと、淫靡に尻を振りたて喘ぎ声を上げて身悶えする姿を目の前にすると、凜とした氷の様に怜悯な気配を漂わせていた烈女を此処まで追い落とした姿を目の当たりにして、疼く様な嗜虐の快感が下腹から込み上げて来て、股間の物が益々硬化して行くのであった。

村崎は左隣の女の手を掴むと、屹立し始めた自分の肉塊を握らせた。

女も視線は晴江のその部分に釘付けになったまま、村崎の持ち物を扱き始めた。

そして右隣の女に手を伸ばして、女の股間をまさぐった。

口では散々野次を飛ばし、狂った様に笑いさざめいていた女であったが、晴江の凄艶な艶技に煽られているのか、股間からは大量の熱い樹液が滲み出していた。

胎内に収められた卵と格闘する女達は太股を固く閉じて忙しく大腿を上下させたり、見事に張った尻を左右に揺さぶったり、小刻みに腰を震わせたりを続けていた。

白い下腹が興奮して赤く染まり、腹の中の卵を割り砕こうと努力する光景は男の劣情を掻き上げるものであった。

今は女達の演じる壮絶な行為に魅せられて、^{しわぶ}咳き一つ聞こえないシーンと静まりかえって皆が見詰める中、卵と苦闘して身悶える女達の艶めかしい吐息だけが広間に静かに響いていた。

突如、静寂の中でカシャと、小さな音がお竜の下腹から漏れた様な感じがした。

腹の中の卵相手に身悶える姿に興奮を隠せなかった男の口からから、ほ一つと溜息が漏れ、続いて横に侍る女のヒステリックな哄笑が響いた。

三人の中では一番ソコの出来が良いと綺羅囉からもお墨付きを与えられ、花電車の技術を仕込まれたお竜が、強い肉洞の筋力を復活させ見事に割り砕いたのだった。

ピッタリと閉ざしていた鮮やかなピンク色した媚肉の扉をうっすらと捻げて、男の持ち添え

る椀の中に卵の中身を注ぎ入れた。

男が驚いた目でマジマジとドロドロとした黄身や白身を流し出すその部分を注視した。

それに続く様に曉美も下腹の筋肉を必死の思いで締め上げ、体内の卵を割り砕くことに成功していた。

「ちょっと！何時まで一人で良い気分浸って、卵相手に遊んでいるのよ！お竜姐さんもあんたの娘もさっさと割って次のお客の前に行っているわよ！」

「こちらの大親分さんもあんたの尻振りダンスには飽きたって、呆れてるよ！」

鼻を鳴らす様な喘ぎ声を上げ、体内の異物相手に汗塗れになって苦闘する、元の女親分に邪険な声を掛けた。

「ほんとにスケベな女だね！あんたは、お腹の中の卵と遊んで一人だけ良い気分かも知れないけど、親分さんはお腹を空かして待ち切れないのよ！」

かつての触れれば怪我を負いそうな妖しく煌めく抜き身の刀剣の様な寸分の隙も無い雰囲気は、完全に喪失し、目の前で淫靡な芸を繰り広げる大姐の姿を目の当たりにして、痺れる様な快感に身悶えるのであった。

女達の罵声を浴びて、一層激しく腰を揉み、肉の載った大腿を激しく擦り合わせ、見詰める男女にぶつかりそうな勢いで、尻を突き出したり前に引いたりを繰り返す晴江であった。

そこには、かつて酷使していた娼婦の目の前で下劣な芸を披露する羞恥も、親とも思っていた大親分から裏切られた恨みも忘れて、ただ胎内に呑み込んだ卵を割り砕く事だけに集中しているかの様な女の姿が在った。

眉間に皺を寄せ、汗塗れになり、時には小さな悲鳴のような声を上げながら、「アアーッ！今割ります！」と、一声悲痛な叫びを上げると、苦悶していた腰の奥からカシャと小さな音が響いたような気がした。

そして、ハアーッと小さく溜息を吐くと今まで激しく動かしていた腰の動きを停止した。

「どうした？割れたんかいな？」

村崎の問いに晴江が恥ずかしそうに小さく肯いた。

「卵の椀を取って下さい・・・」

小さな声で、卵の椀を自分の股間に押し当てるように依頼した。

晴江が卵を割った瞬間に、自分達も軽く逝ったのか、暫く茫然としていた女が、晴江の言葉で我に返ったように、慌てて膳の上のお椀を手にした。

女が椀を晴江の肉の割れ目に押し当てると、ピッタリと閉ざされていた、鮮やかなサーモンピンクの華洞がわずかに開き、中から形の崩れた黄身の混じったドロリとした透明の液が流れ落ちて来た。

その様子に女は、信じられないと言う様に、目を見開いたまま、椀を固く掴んでいた。

「おうおう・・・これは晴江姐さんの甘酸っぱい■■メコ汁がいっぱい混じった、美味しそうな卵やで！」

椀の中に注ぎ込まれた崩れた卵の身を見ながら、村崎が相好を崩して、涎を垂らしそうな口で言った。

「卵の殻入れを取って下さい・・・」

膣内の卵の中身を全て放出したことを確認した晴江が次に声をだした。

もう一人の女が殻入れの瀬戸物の椀を押し当てた。

秘肉が大きく開き、肉洞の筋肉を操って中から抽送されるように、晴江の媚肉により押し潰された一続きの殻が、体外に姿を見せ始め、やがて乾いた音を立てて瀬戸物の椀の中に落した。

女達は信じられない物を見たように目を大きく見開いたまま、無言で晴江の秘所を注視し続けた。

そして、次の瞬間、自分達を売春婦に貶め、無理矢理客を取らせて、まるで自分達の生き血を啜る様に支配していた絶対的な権力者が、今や全ての力を奪われ、自分達以下の娼婦に貶められ、このような卑猥な芸を男の前で見せる最低の女に成り下がったことを現実はこの目で確認して、痺れる様な強烈な痛快感が込み上げて来て涙を流しながら笑い転げるのであった。

「あなた達、偉そうな顔して何時も威張り散らしていたけど、台所に立った時は何時もそうやって卵を割っていたんじゃないの？」

「そんな、はしたない事するなんて同じ女として恥ずかしくて見てられないわ！」

と、目に涙を浮かべながら、口を押さえて笑い転げるのであった。

両隣でもお竜と暁美が次の卵を割り終え、その無残な様子を娼婦達から嘲けり笑いされていた。

女達の蔑笑を耳にしながら村崎は、昨日といい今日といい、女達の凄まじいまでの技巧を見せ付けられ、あの気性の強い目高組の女達をかくも従順な娼婦に改造し、短期間の内にこん

な芸まで仕込むとは剛沢という男はとんでも無い男だと、感心したようにハアと一つ溜息を付いた。

卵を割り終えた晴江は、先行するお竜や暁美に続く様に、下座に向かって次の男の前に移動した。

既に最初の卵を割り、殻の厚い地鶏の卵を割り砕くコツも会得したのか、割れた卵の中身で膣内の潤滑も良くなって最初のころのザラザラとした刺激にも悩まされず、体調も回復して来ていたので、最初の時程時間を掛けず、順調に卵を割っていった。

14人分の卵を晴江達3人で割るのであるから、一人で4～5人分の卵を割ることになる。膣の筋肉を駆使して卵を割る芸は、女体にとって過酷な労働であり、先程から疼痛が下腹を襲っていたが、あと少しで全員の分が終わると、自らを励まし、次の男の前に進むのであった。

肉洞内は自分が割った卵の中身でヌルヌルになっており、非常に気持ちが悪く早く終えて膣内を洗浄したいとの思いに駆られていた。

晴江は末席で胡座をかく最後の客の前に進み出ている。

男の隣にあの麗夜が座わっていることに気付いてハッとした。

麗夜は敵意のこもった目で晴江を睨み付けていた。

麗夜の恨みの籠もった鋭い視線を無視するように、男に軽く挨拶して尻を男の方に向けると、卵を押し込むように頼んだ。

自らの愛液と卵の内容物で充分潤滑された肉洞内に、抵抗無く卵がスルスルと呑み込まれていった。

これでお終いだーと、気の緩みも在ったのかも知れないし、自分に対して激しい憎悪を抱く麗夜の前で長い時間自分の惨めな姿を晒したくないと気が急いでいたのかも知れない。

焦って体内に呑み込んだ卵は、完全に肉壺の中に収まっておらず、重なり合った淫靡なピンクの肉襞の奥に僅かに白い表面を見せていた。

晴江が卵の殻を割るべく下腹に力を入れた拍子に、ヌルヌルに潤滑された肉洞を通して、ズポッと大きな音を立てて卵がそのまま体外に飛び出し、男の膝頭に当たって砕けた。

男の下半身が卵に濡れてベチャベチャになった。

銀子や剛沢の愛人達が慌てて雑巾や換えの浴衣を持って走り寄った。

「この女！ 大事なお客様になんて事するのよ！」

麗夜が飛び跳ねるように、呆然としたまま動けずにいる晴江に武者ぶり付くと、晴江の後ろ

髪を鷲掴みにして畳の上に引き吊り倒した。

そして、仰向けに倒れ込んだ晴江を足蹴にした。

他の娼婦達も長年の恨みを返すのは今とばかり、餌に集まるハイエナのように晴江の周りに集まり、次々に蹴り上げた。

女達の暴力の輪の中で、晴江は両手で頭を抱え込み、体を亀の様に丸めて女達の暴行をじっと受けていた。

奈和親分と共に武闘派の組を纏めて来た大姐の晴江に取っては、こんな女達が束になって掛かって来ても敵では無いはずであったが、今は反撃の気力も失い、ただ大人しく暴行を受けるだけであった。

「おいおい、その辺にして上げな！」

見かねたように卵をぶつけられた男が、亜紀達から卵で汚れた脚をタオルで拭かれながら、晴江を足蹴にする女達を制した。

娼婦達にしてみれば、長年の恨みを返すにはこの時とばかり、晴江を蹴り上げていたが、接待を命じられた男から制せられて仕方無さそうに蹴り上げる脚を止めた。

騒ぎを聞き付けて、駆け付けて来た剛沢も、

「安達の兄貴、すまねえ！晴江にはこの後できっちりと不始末の詫びを兄貴に付けさせるから、ここは抑えてやってくれ」と、膝を着いて詫びた。

「まあ、良いつて事よ！この後、晴江姐さんを抱かせて貰う時にきっちりとこの落とし前は付けさせて貰うから・・・」

安達はこの後で晴江の肉体をいたぶる際に良い口実が出来たとでも言うかのように卑猥な笑みを浮かべた。

「そら、最後まできっちりと卵を割るんだ！」

剛沢が晴江を起き上がらせると、売春婦から思い切り蹴り上げられ、赤く腫れた体で、安達の方に尻を向けさせた。

安達が嫌らしい目付きで見詰めながら晴江の秘奥にそっと卵を埋め込んだ。

「旨い！これは上等な松坂肉だぜ！」

男達がすき焼きに舌鼓を打った。

「それに、このお竜姐さん達の本気汁の混じった地鶏の卵も絶品だぜ！」

男がお竜の割った卵に肉を潜らせて、美味しそうに頬張った。

「おい！卵が切れて来た！もう一度卵を割ってくれ！」

一人の男が手を挙げて、今度は別の女の卵割りの芸を目の前で見ようと声を上げたのだった。
これにつられた様に何人もの男が女達を呼んだ。

「おい！犬がちんちんする様なポーズをしてみな！」

曉美を呼んだ男が下卑た笑みを浮かべながら命令した。

男の周囲に侍る娼婦達も男の思い付きに面白そうに曉美の手脚を取り、腰を降ろさせて両股をこじ開け、両手を前に垂れさせて、無理矢理犬のちんちんのポーズを取らせた。

男の目に突き出した乳房や剃毛された股間をマザマザと晒す羞恥に曉美の顔が歪んだ。

男は、好色な目で曉美の滑稽な全裸姿をマジマジと上から下まで見詰めと、何を思ったか卵を手にしたまま曉美の前に身体を投げ出し、畳の上に腹這いとなった。

今や男の顔は、開け放たれた曉美の股間の間近に迫り、酒臭い熱い息が剥き出しの秘所に掛かった。

父と杯を交わし会った義兄弟として、目高組を何度も訪れた事のある、曉美も顔見知りの親分から成熟した秘裂を間近から直視される羞恥に曉美の顔が見る見る赤くなり、思わず両手で顔を覆った。

周囲に陣取った今は大亜門戸会の娼婦となった元目高組のお抱え娼婦達は、邪険に曉美の手を掴み、顔から引き剥がすと元通りのポーズに戻すのであった。

暫く曉美の秘裂を鑑賞してすっかり満足した男は、手にした卵を曉美の真下に支えると、そのまま腰を降ろす様に命じた。

曉美の秘部が男の支える卵の上にゆっくりと降りて来て、淫靡な肉の祠が卵の先端に触れた。

「そうだ・・・そのまま尻を落とすんだ・・・」

ギラギラした眼でその部分を直視したまま、男が擦れた声で命令した。

ジワジワと卵の上に腰を下げて行くにつれ、卵と接触していた媚肉の狭間が卵の大きさに少しずつ開いて行った。

曉美の下の方が十分に卵を咥え込んだ事を確認した男は、一点に注視しながら、曉美にそのまま吸い上げる様に命じた。

男の目の前で陰裂の狭間に咥え込まれた卵がスルスルと上昇を始め、陰孔の中に消えて行った。

卵の最も直径の太くなる部分が狭い肉洞の入り口を通過する時、ウッと小さく声を漏らし辛

そうに眉根を寄せた。

今までそこに在った卵がまるで魔法の様に消失したことに周囲に陣取る娼婦達から驚きの声が上がった。

真下から曉美の股間を見上げる男は、完全に卵を体内に吸い上げ、全くその痕跡も残さずに再びピッタリと閉じられた秘所を見詰めて満足げに肯いた。

「ほら、早く卵を割るんだ・・・」

男は卵を入れる腕を曉美の股間の下に差し入れた。

はいっ—と、小さく返事を返した曉美は小さく腰をくゆらせ下腹に力を込めた。

剥き出しの曉美の腹の筋肉が緊張する様子が、取り巻く女達の目に映った。

カシャッと小さく妙音が曉美の下腹を通して聞こえた。

やがて、ピッタリと閉じ合わされていた秘孔が僅かに開き、白身と黄身の混じったドロリとした卵液が滴り落ちて来て、真下に置かれた腕の中に溢れ落ちた。

男は淫靡な目で真下から曉美の排出作業を見守った。

中身を全て排出すると、入れ替わりに置かれた卵の殻入れに割れた殻を放出した。

薄皮で一つに繋がったままの細かく砕かれた殻が、秘裂を開いてゆっくりと垂れ下がり、やがてカランと音を立てて殻入れの中に落下した。

全ての作業を間近で見終えた男が、満足した様に肯いた。

朝からまだ何も食べないまま、男達の前に引き出され、肉体を酷使していた女達の空腹の胃が小さな音を立てるのを男が聞き咎めた。

「そうか、そうか、お前達も腹が減ったか？」

男が嬉しそうな顔をして、鍋をつついて大きな肉切れを箸でつまみ上げた、

フウフウと口で吹いて粗熱を取ると、再び四つん這いの姿勢を取らせた曉美の尻をこちらに向けさせて、そのまま秘奥に押し入れた。

「ああ・・・熱いわ！」

秘所から突き上げる灼熱感に曉美が腰を揉んだ。

「遠慮することはねえ・・・どんどん食べねえ！」

曉美の身悶えにも斟酌することなく、グイグイと箸で肉切れを曉美の肉洞に押し込んだ。

「何だ、これは！中はおつゆでビショビショじゃ無いか！これじゃすき焼きじゃなくてしゃぶしゃぶだろう？」

何度も卵を膣内に入れて割ってみせる珍芸を繰り返す内に、女達の下半身も何時か得体の知れない快美感のようなモノが込み上がって来て、何時しか無意識の内に秘奥を濡らしていた。豊富なサラサラとした透明の樹液をまるで湖のようにたたえた膣孔内に肉を埋め込む様子が、まるでしゃぶしゃぶで肉をお湯の中に潜らせる様子を連想させたので、隣に座った娼婦の肩を叩きながら笑い転げるのであった。

「晴江姐さん達は、後の余興の用意が在るんで一端引き上げさせてくれ・・・」

宴が進んで食事が大方終わるのを見計らって剛沢が声を上げた。

膣内に残った卵の残滓が流れ落ちて畳を汚さない様に、大人用の紙オムツを手にした三下組員が現れた。

好奇心目で見詰められる中で、三人の女が並んで宴席の真ん中に仰向けに横たえさせられた。三下から赤ん坊の様に両足首を掴まれ、腰を持ち上げられ、その下に紙オムツが差し込まれた。

両脚を大きく開かされ、高く腰を持ち上げられた時に、綺麗に剃り上げられた股間の中央の恥ずかしい二つの穴が周囲を取り囲む男女の目にハッキリと映った。

まるで赤ん坊にオシメを着せる様な作業を周囲を取り囲む男女がギラギラした眼で見詰め可笑しそうにゲラゲラ笑い声を上げた。

男達の作業の間に、女達は遂に堪え切れなくなって、顔を覆って嗚咽を始めた。

紙オムツを着け終わると三下達が、女達の手を掴んで引き起こし、コの字型に居座った村崎會の男達の前に直立させ、退室の挨拶させようとした。

豊かな乳房を剥き出しにした雪白の裸体に白い紙オムツだけを纏った暁美の姿や極彩色の刺青を施された身体に大きな紙オムツを着けられた、或意味全裸より恥ずかしい晴江達の滑稽な姿を目にして今は大垂門戸会のお抱え娼婦となった女達が快哉を伴って涙を浮かべながら甲高い笑い声を上げた。

成熟した女の滑稽なオムツ姿に居並ぶ男女から哄笑を浴びせられながら、銀子達が手を引いてその場から立ち去ろうとしていた。

その時、末席に座っていた安達が余計な事を口にしたのだった。

「折角紙オムツをしているんだから、そのまま中にお漏らししてみたらどうだ？」

安達の愚劣な提案を耳にして、村崎が卑猥な笑みを口元に浮かべながら大きく肯いた。

「ここに居る村崎會の親分方がお前達のお漏らしする所を見たいと言っているんだ。見せて

やったらどうだ？」

思いがけない状況に置かれ羞恥に立ち竦む女達に黄原が冷たい視線を浴びせながら言った。

ああ一つ、イヤ、イヤ！と、お竜が両手で顔を覆いながら羞恥にナヨナヨと身体をくねらせた。

荒くれ男達に混じって、白刃の下を潜り抜けて来た鉄火女も、度重なる羞恥責めの前にすっかり強い女としての鎧を剥ぎ取られ、か弱い女としての本性を見せたように嗚咽の声を上げた。

「何恥ずかしがってやがる！昨晚は俺たちの目の前で堂々と股をおっぴろげて糞や小便を垂れ流したくせに！表から見えないオムツの中で小便を漏らすくらいどうってこと無いだろう？」

男達の言う通り、野卑な目で見つめる男達の目の前で全裸で排尿するのに比べたら、股間が隠されているだけ羞恥は少ないと言えるかも知れないが、それでも赤ん坊の様なオムツを当てられて排尿する醜態を晒すことは、この気位の高い女達には抗しがたい恥辱であった。

羞恥に立ち竦む女達に男達が笑いながら声を掛けた。

「さあ！さっさと始めないか？水気が足りないと言うなら腹一杯水を飲ましてやろうか？」

黄原が紙オムツで被われた股間を叩きながら声を荒げた。

「分かりました・・・今から始めます・・・」

この男達には逆らえないことを幾度も経験して来た晴江が消え入りそうな声で応えた。

晴江の言葉に晁美もお竜もこの愚劣な男達に逆らう無駄を覚った。

村崎の目の前には三人の女が横一列に並んでいた。

居並ぶ男女もこの大の大人のお漏らしという滑稽な瞬間を間近で見ようと、村崎や上座に陣取った男達の背後に幾重にも人垣を作った。

「今から奈和と親子の杯や義兄弟の杯を交わし会った皆様の前で大恥を晒します。皆様うんと笑ってやっておくんなさい・・・」

血走った目で自分達を見詰める男達を見渡して晴江が精一杯の皮肉を口にした。

村崎がニヤッと口の端を歪めて無言で肯いた。

目を皿の様にして股間に視線を送る男女は声も上げずシーンと静まりかえってその瞬間を待ち受けた。

まるで断崖から身を投げる様な悲痛な決意を込めた晴江が一つウッと息を吐くと、股間から

微かに妙音が聞こえ始めた。

それにつられた様にお竜と暁美の股間からもハッキリとまるでシャワーを流す様な音が聞こえて来た。

女達が紙オムツの中に放尿する音を少しも聞き逃すまいと広間はシンと静まりかえった。

奇妙な静けさの中で女達の股間から静かに淫靡な音が流れ続けていた。

村崎は脇息に肘を置いて頬杖を付きながらネットリとした眼で、女達の紙オムツの股間を被う部分を見詰め淫靡な笑みを浮かべた。

村崎の両隣に居並んだ男達が立て膝をして身を乗り出し耳をそばだてた。

ピッタリと股間を被う紙オムツの隙間から漏れるシャワーを流す様な小さくくぐもった音を耳にしながら、居並ぶ男女が興奮で頬を赤らめながら淫猥な笑顔を作った。

股間に当たった部分が徐々に水分を吸い取って膨潤して、重たく下に垂れ下がって行く様子が表面からも窺えた。

ピッタリと密着した紙オムツと大腿の隙間から熱い蒸気が漏れ、広間に微かに尿臭が広がって行った。

村崎の両隣に陣取った男が確かめるように股間の膨らんだ部分を掌でポンポンと下から叩く様に持ち上げてその重さを量った。

「へへ・・・随分と出したじゃないか？ズッシリと重いぜ・・・」

「随分と暖かいじゃないか・・・それに、少し臭うぜ」

紙オムツの上からお漏らしの結果を確認される女達が、両手で顔を押さえてシクシクとさざめ泣いていた。

「赤ん坊や寝たきりの婆みたいにオムツにお漏らしをして、これが音に聞こえた目高組の女達とは信じられないわ！ちょっとは、恥ずかしいと思わないの？」

紙オムツの中に放尿を終えた女達を指差しながら、再び娼婦達が狂った様に笑い声を立てた。

晴江達にとっては、周囲の男女から浴びせ続けられる嘲笑を甘んじて受けるしか無かった。

嘲り笑いと聞くに堪えない言葉を背中に浴びせられながら、銀子達に手を引かれて涙に咽び憔悴仕切った姿で、膨らんだ股間のため歩き難そうに立ち去った。

後には、村崎會の男達と娼婦だけが残された。

ビデオ上映

娼婦達の酌で食後の酒宴を楽しんでいる所に、大亜門戸会の若い衆が大きなスクリーンとビデオプロジェクターを持ち込んで来た。

「これから次の出し物までの間に、退屈しのぎに、ちょっと面白いビデオでも見てくれ」
再び現れた剛沢が村崎會の男達に挨拶をした。

宴会場には横幅が3メートル以上ありそうな大きな白いスクリーンが設えられた。

スクリーンの両脇とスクリーンに向かってコの字に座る宴席の男達を背後から取り巻くように幾つものライブステージで使う様な大型スピーカーが手際良く配置され、スピーカーケーブルがセットされていた。

若い衆が手慣れた手付きでプロジェクターを操作すると、カーテンを引かれ明かりを落とされた室内にボウッと明るくスクリーンに画像が映し出された。

男達も男達に^{うなだ}項垂れ掛かる娼婦達も興味深そうにスクリーンを見詰めた。

スクリーンに映し出された画像は最近流行り始めたハイビジョンで撮影された鮮鋭なものであった。

スクリーンには日本風の部屋の中で座布団の上に胡座をかき、談笑しながら、膳の上に並べられた肴をつつきながら、旨そうに酒を酌み交わす二人の男が表れた。

二人の男の厳つい風貌から、どう見てもカタギの男達には見えなかった。

部屋の様子から晴江が自分の体を売るために、建てられた晴江専用の部屋の中で撮影している事が分かった。

「お待たせしました。ようこそいらっしゃいました・・・」

カラカラ、ピシャと格子戸が閉まる音に続いて、スゥーと障子が開いて、着物姿の晴江が部屋に姿を現した。

「おう！待ってたぜ！」

晴江の挨拶に二人の男が、ニヤッと頬を歪めて玄関の方を振り向いた。

その男達の顔を見て、上がり框に正座したままの晴江の顔が見る見る青ざめて行く様子が、ハイビジョンで撮影された鮮明な画像となって巨大なスクリーンに映し出された。

「覚えてて貰ったかい？嬉しいね・・・そうだよ、お前達に滅ぼされた^{オカテル}岡照組の山崎と内田だよ・・・」

目高組も岡照組も元は村崎會の傘下で同じ様な地位にいる暴力団であったが、数年前両者の

組の間で抗争が発生し、出入りの結果、目高組が勝利して岡照組は消滅して、岡照組の縄張りや権益は全て目高組の物となっていたことは、ここに集まった村崎會を構成する幹部達は当然知っていた。

この抗争は、そもそも村崎會内部の掟を破った岡照組が一方的に仕掛けて来たものであり、仕方無く受けて立った目高組が逆に勝利したと云う事を、抗争終了後に村崎親分も追認しており、傘下の兄弟組同士の抗争とは言え、目高組には非は無く、一方的に岡照組の責任とされ、潰された岡照組の組員は全員破門され、村崎會内部に留まる事も出来ず、皆散り散りになって消息は、分らなくなっているはずであった。

その元岡照組の幹部が二人スクリーンに映っていたのだった！

「お前達に岡元親分を殺され、弁明の機会も与えられないまま組は取り潰され、生き残った組員も破門され、全員当ても無く放り出されてしまった。その上、村崎親分から破門の回状が全国の親分衆に回されてしまって・・・ヘッ！組のバックを失ったヤクザなんて惨めなものさ・・・何処へ行っても厄介者として白い目で見られて、爪弾きにされて落ち着く所も無い・・・昔仲良く付き合っていたヤツや、目を掛けていたヤツらからも・・・ヘッ！全く^{てのひら}掌を返すとはこの事だぜ！」

これまでの苦しく惨めな^{きすらい}流離の記憶が浮込み上げて来たのか、二人の男が苦しそうな表情を浮かべて吐き出す様に呟いた。

そして、恨みを込めるように晴江の方を敵意を込めた目で見詰めた。

男達の憎しみの籠った視線を受けて晴江の貌は見る見る強張り色を失っていった。

「前は、晴江姐さんの総身彫りの刺青までは舐ませて貰っただけで、いよいよこれからっていう肝心な所でお竜に飛び込まれて邪魔されてしまい、その体を楽しませて貰いそびれたが、今日は晴れて客と売春婦の関係だ！誰も邪魔が入る筈もない・・・たっぷりと楽しませて頂くぜ・・・」

内田が舌なめずりをしながら低い声で呟いた。

「へへ・・・ちげえーねーや！前回お前を助けに飛び込んで来たお竜も今ではお前と同じ穴奴隷の身分だ！今頃何処かで男に抱かれてヒィヒィ脂汗を流しているだろうぜ！」

晴江の怯えた表情を見透かした様に山崎が笑い声を上げた。

自分達の親分を殺され、組を潰され、シノギの場を失って辛い放浪の身となった恨みを今その体で返して貰おうと、言う様な意味を山崎が冷酷な笑みを浮かべて呟いた。

二人の冷酷な表情を目にして、目高組の大姐だった頃には怖い者知らずの剛胆さを誇っていた晴江も流石に怯えた表情を浮かべ、自然と体がガクガクと恐怖で震える様子がスクリーンに大写しにされた。

岡照組と目高組の抗争の最中に目高組の大姐達が岡照組に拉致され、暴行されそうになっていたーいや、あるいは本当は、岡照組の男達によって輪姦されたようだと、以前から村崎會の幹部の間では陰で噂されていたが、画面の中の二人の男の会話から、どうやら事実で在った様だと隣会う男達同士でヒソヒソと話し込む声が流れた。

「まずは素っ裸になってその綺麗な刺青を見せて貰おうか？」

内田が顎をしゃくって言った。

上がり框に正座したままだった晴江が、血の気の失せたような表情でフラフラと立ち上がった。

「そんな所にボンヤリ突っ立てないで、もっとこっちに来るんだ！」

二人に促されて、恐怖に放心したままなのか虚ろな表情のまま晴江が二人の前に進み出た。

「さあ、先ず着ている物を脱いで貰って、その見事な刺青を見せて貰おうじゃないか・・・」

据えた目付きで血の気を失った晴江の姿を睨み付け、舌なめずりしながら命じた。

復讐心に燃える二人の男が、この後どのような責めを仕掛けるのかと思うと、座に居合わせた男女は、興味津々でスクリーンに目が釘付けとなった。

かつては男勝りの威勢の良い啖呵を切って、男達など屁でも無い様に扱い、実際に修羅場になっても得意の空手技で男達を叩きのめした事もある、超武闘派組織の大姐として組を占めて来た、勝ち気の女親分の姿は其処には無く、まるでライオンの前に引き出された小兎の様に怯えた様を見せ、青ざめた顔で恐怖に打ち震える女の姿が画面にさらけ出されていた。

立位のまま上体を屈めて足袋の小鉤に指を掛けようとするのを、

「そんな物はどうでも良い！先ずその綺麗な体を拝ませて貰おうか！」

男達は手にした乗馬用の鞭で、それぞれ晴江の尻や胸をペシペシと軽く叩きながら先に着物を脱ぐ様に命令した。

悲痛な表情を浮かべ、ハァーと一つ息を吐くと、意を決した様に堅く唇を結び、目を閉じて、帯留に細かく震える指を掛け、その綺麗に織り上げられた紐を取ると、次に衣擦れの音をさせながら帯を解き始めた。

他に物音一つ無い静寂な部屋の中でシュッシュという帯を解く艶めかしい音だけが広間に詰めた男女を取り囲む様に配置されたスピーカーから流れていた。

解かれた帯が畳に落ちて、晴江の周囲で蜷局を巻いた。

続いて濃い色地の友禅の着物の襟に手を掛けて左右にはだけた。

売春婦としての商売柄か下には余り多くの肌着を重ねておらず、薄水色の長襦袢と浅黄色の腰巻だけのようであった。

黒い留め袖を脱ぎ捨てた後、薄い絹の長襦袢姿からその下に隠された晴江の体の線が見えるようで、ふらりの男が生唾を呑み込む音が明瞭に録音されていた。

スクリーンを食い入るように見詰める男女も、咳き一つ上げずに静かに見守った。

閉じた目尻から一筋涙を溢しながら長襦袢を肩からスルリと降ろした。

上半身が剥き出しとなり、背中一面と肩から二の腕にかけて彫り込まれた見事な刺青、そして色鮮やかな刺青で埋め尽くされた両乳房が露わとなった。

「お前さんの刺青を拝ませて貰うのも二度目だが、何時見ても立派な彫り物をしているぜ・・・」内田が感心した様な声を上げた。

「さあ、腰の物も取るんだ！」

山崎が腰巻一枚になったまま恥ずかしそうに体をくねらせ、両腕で乳房を抱え込む様に隠して棒立ちになっている晴江の尻を督促する様に鞭の先で軽く叩きながらに声を掛けた。

腰の周りを覆う最後の布を取ることに、流石に躊躇した様子を浮かべたが、内田に怒鳴りつけられ、小さく嗚咽しながら、腰の紐に震える指をかけた。

腰巻を固定していた紐が解かれ、腰巻がハラリと足元に落ちた時、山崎と内田が大笑いを始めた。

その声につられる様にスクリーンに見入る男女も大声で笑い出した。

腰巻の下には越中褌のようなエプロンの様な形の白い布切れを付けていたのだった。

それは褌と言うには余りにも小さく、漸く秘部を隠すことが出来る程度のまさに布切れで、羞恥の部分を隠すと言うより逆に股間に妖しげな雰囲気醸し出していた。

その上、その正面の前垂れの部分には太い黒線で二つの円が描かれその円の中心を通過して左右に二つに割る様に縦棒が走る卑猥なシンボルマークが描かれていた。

「お前、何時もそんな間抜けな物を身に着けて客の前に出ているのか？腰巻の下にパンティと言うのは聞いた事があるが、腰巻の下に越中と言うのは聞いた事が無いぞ！」

と内田が腹を抱えて笑い転げた。

「しかもオ●マーク入りの褌とはな！」

山崎も晴江の恥ずかしい姿を指差して大笑いした。

その浅ましくも有り滑稽でもある姿を人前で晒す元女親分に元目高組の娼婦だった女達が一機に溜飲が下がったとでも言う様にスクリーンを指差して涙を流して笑い転げた。

内田が鞭の先でそのエプロンのように前に掛けられた小さな布切れを捲り上げた。

「へへ・・・まっ黒黒のお毛毛が見えるぜ！」

「その奥に観音様の姿もうっすらと見えらあ！」

二人とも晴江が抵抗出来ない事を良いことに、鞭の先で僅かに局所を覆っていた布を捲り上げ、股間の柔肉を突いては笑い声を上げた。

画面の中の晴江も顔を真っ赤に染めて、羞恥に堪えかねた様に、両手で顔を覆うと嗚咽の声を上げていた。

ひとつ切り悪さを加え、笑い転げた二人の男は真顔に戻ると、

「そんな、邪魔な布切れはさっさと取ってしまえ！」と命じた。

両目から涙を溢れさせながら、晴江が布切れを留めていた細い紐を解き、布切れがハラリと足元に落ちた。

その瞬間、刺青の施されていない白い股間の中央の豊かな黒い繁茂が露わになった。

羞恥に堅く唇を食い縛り、目を閉じて両手で股間と両乳房を隠して身を屈めて男達の視線から少しでも裸身を隠そうとする晴江に対して、

「折角立派な刺青を背負った綺麗な体をしているんじゃないか！ケチケチせずにはっきり見せたらどうだ！」

「その手を退けて立派なオッパイとオ●コを見せてみろ！」

男達に強制されて、乳房と秘所を隠していた手をオズオズと退かして、気を付けの姿勢を取った。僅かに身に足袋一枚を残しただけの全裸姿を男達の視線に晒す晴江であった。

刺青を施された腕を伏せたような乳房と、股間の黒い繁茂に男達の視線が行ったり来たりした。

「どうでえ！見事な刺青じゃないか？」

「それに体つきも随分と男好きするような色っぽさじゃないか？」

男達の全身をゆっくりと這い回る様な淫靡な視線と卑猥な言葉に堪えられなくなったように、

再び両手で顔を覆って嗚咽する晴江であった。

「あの男勝りの晴江姐さんが、まさかこんなに女々しくなって俺たちの前でシクシク泣くとは思わなかったぜ！」

「泣いたって許してやるものか！これも身から出た錆ってやつだ！今日はこってりと重なる恨みを返して貰うからその積もりでいやがれ！」

畏怖さえ感じていた強い女が唯の弱々しい女となって自分達の前に現れ、この女をこれから自由に出来るとの嗜虐的な喜びに酔い痴れるように叫んだ。

「何時までボサッと突っ立て無いで、三つ指突いて土下座して詫びを入れるんだ」と、内田が怒鳴りつけた。

命じられるままにオズオズと男達の前に腰を屈めた晴江は、二人の前で正座して頭を深々と下げた。

「こっちの少しばかりの落ち度を針小棒大に騒ぎ立てやがって、無理矢理抗争に持ち込み、挙げ句の果てに俺たちのシマを横取りしやがって！飛んでも無い奴らだぜ！さあ、その時の詫びを入れて貰おうか！」

晴江にしてみれば、あの時の抗争は岡照組の方から一方的に仕掛けられた喧嘩と認識している筈であり、何も謝る筋合いは無いと思っている筈であるが、今の立場では逆らう事も出来ず、悔しそうに涙を浮かべながら、土下座して詫びの言葉を述べるのであった。

詫びの言葉が途切れると二人は容赦無く無防備な晴江の背を鞭で叩いた。

始めは晴江の詫びの言葉を正面で腕組みしながら面白そうにフンフンと聞いていた二人であったが、つと山崎が立ち上がり土下座する晴江の背後に回った。

そして、「ほら、もっとケツを上げて深々と頭を下げないか！」

と晴江の尻に背後から鞭を与えた。

山崎に命じられ、脚を正座に組んだまま畳に顔を擦り付けるように深々と頭を下げたので、山崎の目の間に晴江の豊かな腰が大きく迫り上がった。

腰を折って晴江の尻を背後から覗き込む山崎の目の前に恥毛に縁取られた秘裂と薄紫に染まった菊花がマザマザとさらけ出された。

「へへ・・・元目高組の女親分さんの恥ずかしい恥ずかしい二つ所が丸見えだぜ！」

羞恥の部分を男の目に晒す晴江は言葉で捌られ、男の淫靡な視線をその部分に感じて晴江の

尻がブルブルと震えた。

「へへ・・・案外毛深いじゃないか？尻穴の周りにもびっしり毛が生えているぜ！」

山崎の指摘する様に、画面には黒々とした陰毛に縁取られ幾重にも折り畳まれた少し色素の沈着した柔らかな羞恥の花弁と可憐な菊の花に似たセピア色の花弁が大写しにされた。

山崎が鼻先を晴江の陰部に近付けて其処の有様を凝視したので、興奮した荒い鼻息がヒリ付く様な視線を浴びせ続けられる女の命の宿る場所に掛かり、晴江の尻がビクリと揺れた。

「へへ・・・良い香りがするぜ・・・熟れた雌の匂いだ！」

山崎が鼻先を近付けて、羞恥に身を染め登った体温によりその部分から立ち昇る臭気を嗅ぐ様な仕草をした。

「おや？・・・此処に白いモノが混じっているじゃないか？」

晴江の秘園を縁取る艶々とした黒い春草の中に、一本の白い縮れ毛を発見して、山崎が嬉しそうな声を上げた。

「テメーもまるで30女みたいな若い態^{なり}はしているが、もう40半ばを過ぎている筈だから、白髪の本一本も出ても不思議じゃないわな・・・」

と、言う指を伸ばして秘毛を掻き分け、プツツと白い縮れ毛を抜き取ると、ゲラゲラ笑いながらそれを内田に手渡した。

内田もそれを笑いながら手にして、繁々と見詰めながら、

「普通の娼婦ならそろそろ売春稼業^{かぎよう}を卒業する年頃で、これから商売を始めようってんだからお前もご苦労なこったぜ！」

と、晴江の心を掻き毟る様なからかいの言葉を投げかけ、腹を揺すって笑い続けた。

「もっと中の方まで良く見せて貰おうか・・・」

と、冷酷な声で言うと三指突いて土下座をしていた晴江の両手をねじ曲げるように背後に持って来させた。

憎い仇敵の前に、尻を高く擡げたまま上半身の体重を胸と顔で支える屈辱的な姿を晒した。

「ほら、自分で自分の大事な所をパツクリと開いて、その邪魔な毛を掻き分けて、奥の奥まで見せるんだよ！」

両手で自らの尻たぶを開いて、憎むべき男の目の前に隠された秘所を晒す事を強制されて羞恥と屈辱感に涙を浮かべた。

「ほら、さっさと開かないか！」

余りの羞恥と屈辱感に呻吟する晴江に痺れを切らした様に尻を何度も鞭打った。

屈辱感に苛まれて詫び口上が途絶えたとき内田が晴江の背に鞭を当て悲鳴を上げさせた。

羞恥と屈辱感に、涙を浮かべて苦悶する晴江の表情から、自分の手で開くより、男の力で無理矢理押し開かされた方がどれほど楽かと感じている様に見えた。

それでも自分を買った客の命令には逆らえず、白くて綺麗な指先を半ばまで刺青の施された尻たぶに掛けると、怖ず怖ずと左右に開き始めた。

徐々に内部の様子を晒し始める晴江の股間に顔を埋める様に、間近から見詰める山崎の鼻息が一層荒くなった。

山崎の鼻息が秘めた所に当たるのか、晴江が顔を真っ赤にしてブルブルと体を震わせた。

男達の前で自らの手で最も恥ずかしい部分を押し開かなければならない屈辱感に、目から涙がこぼれ落ち、苦悶に顔が歪む様子が画面に大写しになった。

内田が、そんな羞恥に苦悶する晴江の後ろ髪を鷲掴みにすると、顔を畳にグリグリと押し付けた。

「何をチビチビ開いてやがる！もっとパッキリと全開にするんだよ！」

晴江の羞恥に堪えかねるような動きに腹を立てたのか、怒鳴り声を上げると、尻たぶを支える晴江の掌に自分の掌を重ねて、白く柔らかな臀肉を鷲掴みにすると、力いっぱい左右に秘部を押し広げた。

「奥の院の秘仏のご開帳に御座い！」

秘所を覆っていた最後の襷を一杯に左右に押し開き、その秘奥を露わにさせて、山崎が口上の様な声を上げた。

背後から羞恥の源泉を思い切り押し広げられ、息が掛かる程覗き込まれて、思わずアアッ！イヤ！ーと、悔しげに顔右に振ったり左に振ったり苦悶の悲鳴を上げた。

「アアン、イヤンーじゃないだろう！詫び口上はどうした？」

正面から内田が胡座を組んでいた脚を解いて踵で晴江の後頭部をグリグリと押さえ付け、顔を畳に押し付けて言った。

「へへ、指を離すんじゃないぞ！そのままの姿勢でいるんだ！」

晴江に股間を思い切り開かせたままの姿勢でいることを命令すると、自由な両手を使って大きく押し広げられたままの股の間を好き勝手に撫で始めた。

屈辱の涙を流して詫びの言葉を並べる晴江に、嵩に掛かったように山崎が背後から押し広げ

られた晴江の秘所を指先で撚り上げていた。

山崎の指先で敏感な箇所を撫でられ、その都度ヒッヒッと小さく悲鳴を上げ、体を収縮させ詫びの言葉が詰まった。

「全く何年か前に晴江姐さんの裸姿を拝まして貰ってから、その綺麗な姿が目には焼き付いて離れる事が無かったぜ！その時の姿を思い出しては、何時も両指の世話になっていたが、今こうして、もう一度晴江姐さんの生コを直に指で撫でることが出来て嬉しくて仕方無いぜ！」

山崎が夢中になって晴江の秘所を両手の指を駆使して、忙しくまさぐりながら嬉しそうに叫んだ。

「へへ・・・このオサネだ！この男の子みたいに大きなオサネが夢の中に何度も出て来た事だぜ！」

晴江の陰毛を掻き分け露出した大ぶりの陰核を目にして山崎が嬉しそうな声を上げた。

「しかし、この大きなオサネを押っ立てて晴江姐さんも案外感じているんじゃないかい？」
自分に敵意を抱く男に向かって自らの手で股間を全開にするという恥ずかしい姿勢を晒したまま、苛烈な肉体改造により開発された甘美な秘孔を宿す秘園に憎い男の愛撫を受け続け、心では拒絶しようにも銀子達に調教された敏感な女体が少しずつ反応し、女の命の宿る場所に血流が増加し充血し始めていることを女に飢えた獣の様に爛々と目を光らせる、敵方の男の熱く焦げる様な視線の前に悔しくも露呈し始めた晴江であった。

「へへ・・・よがってクリが大きく育ち始めたと思ったら、今度は奥の方から甘い蜜がジワジワと滲みてきたぜ！」

自分の愛撫に晴江が感じ始めていることを知った山崎が、浮かれた様に、左手の指で秘孔の周辺を撫でながら、隆起を始めた陰核を右手の親指と人差し指で摘んでヤワヤワと揉み始めた。

ウッと呻き声を上げて背中を仰け反らせると、山崎の指先の攻撃を受けながら、今は言葉も出せず悲鳴の様な鳴き声を上げ続ける晴江であった。

「何だかんだ言っても前の方がグッショリと濡れて来たぜ・・・お汁が垂れて来そうだぜ・・・それによ！後の菊の花がまるでイソギンチャクのようにパクパクと口を開き始めたぜ・・・何が欲しいんだよ？これか？」

畳の上に投げ出してあった鞭を手にとると柄の部分の後肉洞にズブズブと突き刺した。

張り型のように太い物では無かったが、硬い柄が直腸内に突き刺された衝撃で晴江が背を仰

け反らして悲鳴を上げた。

それでも山崎に命じられたように、両手で尻を大きく開き続け、自らの手で自分の恥ずかしい部分をハッキリと晒し続ける晴江であった。

羞恥のためか苦痛の為か尻穴からピンと飛び出した鞭の先が、まるで尻尾のようにピクピクと揺れていた。

「俺も何時も思い描いていた晴江姐さんが俺たちの前に不様な姿を晒して下さるのを見て一機に溜飲が下がる思いだぜ！これも剛沢親分のお陰だ！」

内田も晴江の後ろ髪を鷲掴みにして顔を畳にゴリゴリ押し付け、嬉しそうに晴江の悲鳴を聞きながら、詫びの言葉を強制するのであった。

「へへ・・・暖かくってグッショリ湿っているぜ・・・」

牝芯の周囲を弄んでいた山崎の指がとうとう秘裂を割って肉洞の中に侵入を始めた。

中指と人差し指の二本の指で、膣口内の折り重なった柔らかい襞を撫でられて、晴江が苦悶の表情を浮かべて腰を痙攣させヒッヒッと悲鳴を上げた。

「アアー、もうお許し下さい・・・」

背後から責め立てられて、晴江が涙を浮かべて哀願する様に言った。

「何言ってやがる！こんなに嬉しそうに尻尾をピクピク振ってよ！」

晴江の哀願を無視して気持ち良さそうに秘肉の内部をまさぐり続けた。

「へへ、これがGスポットってやつか？」

嬉しそうに指先で内部の探索を続けていた山崎が何かを探り当てた様に呟いた。

山崎の指先の動きに、晴江が小さく悲鳴を上げ、山崎の指を呑み込んだままの下半身をブルッと震わせた。

「まったく、男勝りの大姐はどんな体を持っているのかと想っていたが、ちゃんと女らしい道具も持っていたじゃないか？・・・それに大層感度も良いみたいだしな？」

晴江の膣内の突起を探り当てた男が指先でグリグリと刺激しながら、晴江の反応を楽しんだ。

「お前は口先だけでは詫びの言葉を並べてやがるが、心が籠もっていないな？」

内田が淫猥な笑みを浮かべ腰を上げながら口にした。

「口先だけでは無く、実を見せて貰おうか？」

と、言いながらズボンのチャックをスーッと降ろした。

そして薄汚れた下着の間から早くも硬化し始めた自らの分身を取り出すと、

「ほら、嘗めて見ろ！」

と、赤黒く醜い肉塊を晴江の顔の前に押し付けた。

「どうだ？臭いだろう？最近何日もまともに風呂に入っていないからな！」

内田が笑いながら不潔な垢に塗れた陰茎を晴江の口にねじ込んだ。

勿論画面からは臭いは漏れて来ないが、大スクリーンに鮮明に映し出されたその不潔な肉の塊から、饅えた臭いが漂って来る様な雰囲気画面を見入る者達に伝わった。

事実、晴江も嘔吐しそうな表情で冷や汗を浮かべながら必死に内田のモノを頬張っていた。

普段、金に飽かせて晴江達を抱く様な男達は、金満家ばかりであり、当然風呂にも入っていないような男はいない筈であるので、そのような不潔な男に抱かれるのは晴江にとっても初めての経験に違いないと見る者は思った。

しかし、満足に風呂にも入れない程生活に窮乏している男達がどうして晴江を抱く事ができたのだろうか？一恐らく剛沢が晴江との痴態をビデオに撮らせることを条件に無料で提供したのでは無いだろうかと見る者は思った。

復讐心に燃える者に女を抱かせてその復讐の一部始終をビデオに収めると言う、剛沢の目高組の女達に対する陰湿さを思わず感じるのであった。

悪臭に顔を蹙めながら頬を窄めて必死に内田のモノを咥える晴江の姿を見て山崎もチャックを降ろすと自分の分身を取り出した。

その隆起した臭い立つような不潔なモノが画面に大写しになり、画面に見入っていた娼婦達がイヤッと顔を背けた。

山崎が晴江の尻穴を責めていた鞭の柄を抜き取った。

自分の肛門から与えられていた責め苦が無くなった事にホットした様に見えた。

「こんなに嬉しそうに尻尾を振り立てやがってよ！さっきからビッショリ濡れて姐さんの此処も男を欲しがっている様じゃないか？」

山崎が晴江の豊かな愛液で濡れた指を抜き取り、代わりにその部分に自分の不潔なモノをあてがった。

山崎に強制されて自らの手で左右に尻を大きく開いたままの晴江の秘所に、柔らかに成熟した肉壁を左右に押し開く様に、その醜悪なものがズブズブと埋め込まれて行く様子が映し出されていた。

脂汗を浮かべながら内田のモノを頬張る晴江も今山崎から花芯を貫き通されたことを感じて

鼻を鳴らして身悶えた。

今や二人の男から上下から串刺しにされ責め廻られる晴江であった。

僅かに足袋を履いただけの全裸姿で犬のように四つん這いにされた晴江の上の口と下の口を二人の男が狂った様に激しく腰を動かし突き立てた。

溜まった獣欲を満たそうと激烈に腰を振る男達に煽られるように、鼻を鳴らし、涎を垂らしながら、必死になって男達のモノを咥えていた。

白い足袋の中で足の指が堪えられない様に反り返る様が映った。

食い入る様に見入る男と女達であったが、画面から興奮を煽り立てられたのか、もどかし気に股間から一物を取り出すと、隣に待る娼婦の後ろ髪を驚掴みにして、自らの股間に押し付けた。

娼婦達も抑え切れない程感情が昂ぶっていたので、目の前に饗された怒張を、無我夢中で頬張り始めた。

「テメー、顎で使っていた銀子から扱かれて男を喜ばすための色々な珍芸を仕込まれたんだってな。」

内田が晴江の口内に自分の不潔なモノをねじ込みながら面白そうに笑った。

「銀子はな一、売春婦に成り立ての頃、『鬼の蔵源』とか『地獄の蔵源』と呼ばれている女体調教師の蔵田源一郎の調教を受けて性のテクニックを身に付けたんだ。俺も蔵源の調教を受けて脂汗に塗れて、のたうち回る銀子の姿を見た事があるぜ。・・今でもその時の光景が目に浮かぶぜ。・・大方その時の蔵源仕込みの調教を銀子から受けるお前達の様子が想像できるぜ・・」

淫靡な想像に晴江の口内にねじ込んだ怒張を一層硬くして笑い声を上げた。

「飼い犬に手を噛まれるって言葉はあるが、これじゃ飼い犬に芸を仕込まれるーて、話だぜ！」

と、リズムを付けて腰を動かしながら山崎が笑った。

チグー
違いねーや！と二人は、上下から晴江を串刺しにして腰を突き立てながら笑い上げた。

「銀子から並の娼婦じゃ出来ないような色々な技術をこっそりと仕込まれたーと、聞いていたが本当に晴江姐さんの竿嘗め技術は大したモンだぜ！これがディープスロートという奴か！？本当にこんな技そこのパン助じゃ出来っこないぜ！」

晴江の咽喉深く自分のモノを突き立てながらフウフウと荒い息を吐いていた。

「本当にこれがかつての目高組の大姐とは思えないぜ！」

「ここの締め付け具合もどうだ！俺様の大きな■■■■ポを奥へ奥へと吸い込んで行く様だぜ！
こんなの若い女でも出来ないぜ！当に名器だ！あの目高組の大姐がこんな立派な持ち物の持ち主だとは知らなかったぜ！」

晴江の股間に突き立てながら、ハアハアと激しい息を吐いて感に堪えない様な声を上げた。

「以前晴江姐さんの体を調べさせて貰った時に名器の素質が在ると判っていたが、銀子の調教によって磨き抜かれたんだろう？」

内田も晴江の咽頭を駆使した口技により気もそぞろになりながら応えた。

晴江の肉体に抑え切れない程情感が込み上げて来たのか、男達は二人とも額に汗を浮かべて、オウオウと獣の様な声を上げて腰を振り続けた。

山崎が大きな声を上げて晴江の腰に分身を突き刺したまま体を仰け反らした。

それに煽られた様に内田も雄叫びを上げて晴江の口内に思いの丈を噴出した。

漸く二人の男から解放された晴江は、グッタリと畳の上に崩れ落ち、荒く息を吐く口からは内田の放出した残滓がドロリと畳の上に流れ落ち、閉じることも忘れたように開け放たれたままの股間からは山崎の残した粘っこい白濁した液が溢れ出る様子がスクリーンに大映しとなった。

場面が変わって次にスクリーンに現れたのは、畳の上に敷かれた布団の上で、晴江を間ににして二人の男が川の字に寝そべる姿であった。

内田も山崎の今は素っ裸となっており、一方晴江も前のシーンと同様白足袋だけを身に着けた全裸姿で布団の上に仰向けに寝かされていた。

敷き布団だけで、横たわる三人の上に布団を掛けていなかったのも、天井に仕掛けられたカメラから、見事な胸割れの刺青が施された全身と、刺青の施されていない抜ける様に白い肌を残す股間に生い茂る柔らかくふっくらとした漆黒の春草の様子がよく分かり、その両側に陣取る水滸伝の英傑を背中に刺青した二人のヤクザ男の硬く隆起した股間の様子もハッキリと映し出されていた。

二人の男は左右から晴江の柔らかな胸を揉み上げたり、柔らかな腹を愛撫したり、股間に手を這わせたりしていた。

晴江も左右に寝そべる男達の快感を昂じさせる様に衝き上げた怒張を握り締めていた。

晴江は全く無抵抗のまま、男達の手が自由に股間を騷ることが出来るように少し大腿を開いた。

男達の手がモゾモゾと動き、濃密な繁みを掻き上げる度に、その背後に隠されたピンク色に染まった肉襞がチラチラと画面に現れた。

山崎が晴江の顔を自分の方に向かせると、その唇を奪った。

無理矢理男の無骨な唇を押し付けられても晴江は全く抵抗を示さず、仲の良い恋人同士のよう
に舌を絡め合った。

暫く互いに口を吸い合い、満足した様に唇を離すと、入れ替わるように内田が晴江の唇に自分の唇を押し当てた。

左右の男達は交互に口吻を繰り返している間も、男達の手は休むこと無く晴江の性感帯を責め続けていた。

その左右に陣取った二人の男の性技は、一人が晴江の上半身を騷る間に、もう一人が下半身の騷ると言う様に息の合ったものであった。

鮮やかな刺青に彩られたお椀を伏せたような乳房の頂上で乳首が固そうに隆起していた。

内田が晴江に口付けしながら、手で掴んだ乳首をグリグリと撫でる間、山崎が手を股間に這わせ、股間を覆っていた黒々とした恥毛を左右に掻き分け、その中心に指を這わせた。

秘所を覆い隠していた春草がすっかり掻き分けられ、その中心部スクリーンに露わとなった。

山崎は晴江の脚をたぐり寄せ、小鉤を外して足袋を抜き取ると、その足の裏に頬刷りをして、両足の指を一本一本口に含んで舌を舐めさせた。

さつきからずっと二人の男の愛撫を全身に受け続け、秘裂もすっかり充血して柔らかく膨らみ、その中心からは透明な液がサラサラと流れ落ちていた。

人より大きなクリトリスも充血して、その包皮を破って空豆にも似た雌蕊^{めしべ}を恥ずかし気に表に晒していた。

山崎が晴江に下肢に愛撫を加えている間に、内田がその肥大した陰核を二本の指で摘んでグリグリと捏ね回して晴江に甘い悲鳴を上げさせた。

頃は良しと見計らったのか、内田が仰向けのまま横たわる晴江の上に体を重ねて行った。

内田のモノが晴江の秘肉を通過する時、ヒッと体を強ばらせ声を上げた。

その呻き声を封じるように山崎が晴江の唇に自分の唇を重ね、甘い唇を食った。

内田のピストン運動に合わせるように、山崎が晴江の両胸を揉み上げ、晴江の情感を掻き立

てた。

何度か往復運動を繰り返し、満足したように内田が体を外した。

大の字に開け放たれた股間の下布団が二人の混じり合った樹液でヌラヌラと濡れている有様が映し出されていた。

直ぐさま、山崎が晴江の上に覆い被さり腰を使い始めた。

そして、内田が山崎の動きに呼応して晴江の性感帯を騷り上げた。

胡座座りになって画面を見続ける村崎會の男達は、今は娼婦を自分の腰の上に座らせ、背面座位や正面座位の体位を取って、娼婦達の秘裂を突き刺していた。

男達に腰を使われ胸を揉みしだかれながらも女達は、憑かれたように画面に食い入り、スクリーンに背を向ける形となった娼婦達も顔だけはスクリーンの方を向けて瞬きもせず画面を見続けていた。

何度かに渡って二人の男から交互に貫かれた晴江は、情感が昂ぶって来た所で抜き取られ、また新たに別の男から煽り立てられる行為に、やるせない気持ちになって来た様子が画面からも見られた。

二人の男は自分がイキそうになっては、怒張を抜き出して、興奮状態が少し下がるのを待って、交代して突き通すと言う様に一機に晴江を往生させず、意地悪く晴江の懊悩する様をゆっくりと見下して楽しんでいることは明らかだった。

「どうしたんでえ？イクにイケなくてイジイジしているのかい？」

内田が物欲しげに腰をうねらせる晴江の姿を見ながら笑った。

晴江が顔を真っ赤に染めて恥ずかし気に肯いた。

「こっちも二人で少しずつ腰を使うだけじゃ、イクにもイケない。これじゃ埒が空かねえや！どうだい？ここは、三人で同時に楽しんで見ないかい？」

山崎が何やら内田に囁き掛けた。

「エエッ！そんな事が出来るのかい？」

内田が驚いた様に声を上げた。

「ああ、輸入物のポルノビデオで見たことが在るぜ。普通の女なら無理でも晴江姐さんなら難なくやって見せてくれるだろう？」

と、その方法を内田に伝授すると、仰向けに寝る晴江の下に体を滑り込ませ、仰向けになっ

た自分の体の上に晴江を乗せ上げて、隆々と隆起したモノを晴江の花芯にあてがった。

これに続いて内田が晴江の体に覆い被さって行った。

「アアーッ！無理よ！そんな事！」

二人の意図を察した晴江が、恐怖に打ち震え、思わず腰を振って二人の矛先を外そうとした。

所が、そうはさせじと、二人の男にがっしりと腰を掴まれ動きを封じられてしまった。

「そこらの売春婦風情なら無理でも、晴江姐さんの体は超一流売春婦として調教されたって話じゃないか？やってみなけりゃ判らないだろう！」

人並み大きな二人の怒張が一つの秘孔にあてがわれ、その肉の開孔部を押し広げるようにメリメリと食い込んで行った。

画面を見入っていた娼婦達が、まるで自分のその部分に二つの怒張が押し入って来る様子を想像したのかヒッ！と悲鳴を上げ腰を悶えさせた。

アッアッと短く悲鳴を上げながら、全身を痙攣させる間にも二つの野太い陰茎は、ジワジワと確実に晴江の体内に埋め込まれて行った。

スクリーンには秘孔を長円形に変形させて二本の肉棒を呑み込んで行く晴江の股間が大写しにされていた。

「どうでい？案じることなくすんなりと根本まで入ったろう！」

山崎が笑いながら言った。

晴江は全身に脂汗を浮かべながら張り裂けるような股間を襲う苦痛と戦っているようであった。

そら、これからピストン運動の開始だ！、と晴江に息吐く間も与えず山崎が声を上げた。

その声を号令として二人の男が同時に腰を使い始めた。

ある時は同方向にある時は逆方向に一人の男が右の肉襞を摩ればもう一人は左の肉襞を摩るというように、二人の男が晴江の肉洞内で好き勝手に腰を動かした。

その激烈な刺激に、汗に塗れた顔を激しく左右に振り、声にならない悲鳴を上げつづけるのであった。

「お前のと擦れ合って何だか変な気持ちだぜ！」

全身にビッショリと汗を浮かべ腰を激しく動かしながら内田が笑って言った。

三人の愛液が混じり合った陰水に塗れた二本の肉茎が、晴江の膣壁を擦り上げると共に、互いに摩擦し合っていた。

「おれもこんな気持ちになったのは初めてだ！」

と下から山崎が笑い声を上げた。

今や二人の男の獣欲は押し止められない所まで駆け上り、フィニッシュを目前として、一段と激しく腰を使い始めていた。

そして二人の男に煽り立てられるように、脂汗に塗れた晴江も、狂った様にわめき声を上げてた。

二人の男と一人の女が獣の様な奇声を上げて同時に絶頂に達した。

体を仰け反らせて恍惚の快感に浸るシーンを見せられ、広間に詰めていた男女も一斉に頂点を迎え、女は自らの肉洞に迎え入れた男の肉茎に熱い樹液を迸らせ、男は女の膣内に一機に白濁した液を放出した。

再びシーンが変わり、晴江の売春部屋の中に設えられた拷問室の中に移っていた。

全裸のままの晴江は上半身を厳しく麻縄で縛り上げられ、黒い石を敷き詰めた床の上に正座させられていた。

両手を麻縄で高手小手に縛り上げられ、余った縄が乳房の上下を二重三重に縛り上げ、形の良い乳房を上下から搾り上げる様に括りだしていた。

縄止めを済まして、縄尻を握った内田が時代劇の悪目明かし宜しく、ピンと縄を引き絞ったまま晴江の背に脚を掛けてグリグリと晴江の上体を揺さぶった。

内田も山崎も全裸のまま、股間から太く醜いモノをぶら下げている。

何度も使った事のある自分の仕事部屋とはいえ、周囲を埋め尽くす様に並べられたおぞましい拷問道具を見て、怯えた様に、「ああ・・・もうお気が澄みましたでしょう、もう堪忍して下さい・・・」と、二人の男に哀願した。

「何を言ってやがる！今まで散々鼻を鳴らしてヨガリ狂いやがって！今までののは、お前を喜ばしただけで、逆にこっちが感謝されたいくらいだぜ！」

「本当の復讐はこれからだぜ！」

顔を恐怖に蒼白に染めて怯えてガタガタ震えるか弱い女の姿に、暗い嗜虐の情念が燃え上がるのか、二人は股間のモノをピクピクと隆起させながら嬉しそうに叫んだ。

「お前もヤクザ者の端くれなら、自分が犯した不始末の落とし前は、自分でキッチリと付けなければならない事くらい分かるだろう！」

ほざく様に吐き捨てると、乱暴に縄尻をグイッと引っ張り上げて、正座する晴江を無理矢理吊り上げる様に立ち上がらせた。

恐怖の余り腰の抜けたようにふらつき、思わずくずおれそうになった晴江を内田が背後から抱き抱えた。

体に力が入らないのかまるで蒟蒻を立たせたようにぐにゃぐにゃになった晴江を背後から抱き締めながら面白半分に乳房を揉み上げ、しなやかなうなじに頬刷りした。

「おい面白い物が在ったぜ！」

山崎が太い綿ロープを手にしてこちらを振り返った。

まるで車を牽引する際に使う様な太いロープで、直径が3センチ程在りそうだった。

「それは良いぜ！それを向こうの端からこっちまで張り渡してよ・・・」

内田が晴江の体を背後から弄びながら舌なめずりをした。

二人の男により拷問室の中にロープが架けられた。

予め拷問室にはそのような事が出来る設備が整っていて、ロープは床から丁度晴江の腰の高さ程の位置にピンと張り渡された。内田が意地悪くロープの途中に三箇所程ロープを結んで大きな結び目も作っておいてあった。

「ほら、ほら、これを跨ぐんだよ！」

二人掛かりで晴江を持ち上げると、足首を掴んで左右に押し広げ、ロープを跨ぐように晴江の体をピンと張られたロープの上に降ろした。

強い張力の掛かったロープが晴江の股間に容赦無く食い込み、アアーッイヤ！と悲鳴を上げた。

「嫌じゃ無いだろう！もっとしゃんと胸を張って立たないか！」

山崎が背後からグリグリと縄に搾り上げられ前に突き出した乳房をしごき上げ上体を起き上がらせた。

そして、腰に両手を掛けると晴江の体をグイッと前に押し出した。

ザラザラとしたロープと密着した秘所が擦れ思わず悲鳴が上がった。

「何ギャーギャー騒いでやがるんだよ！さっさと前に歩かないか！」と、山崎が晴江の尻を蹴り上げた。

内田がささらになった割れ竹を手にして晴江の腹に打ち付けた。

山崎も真似て割れ竹を手にした。

こうして少しでも歩みが遅れると容赦無く割れ竹の鞭を晴江の体に浴びせかけた。

腹といわず胸といわず尻といわず、容赦無く晴江の体を叩きのめし、見る見る体が赤く染まって行った。

割れ竹の打擲に身悶える晴江の姿が二人のサディスティックな本能を刺激するのか、二人の股間のモノが隆起し上を向き始めた。

二人の男の打擲に励まされて漸く三分の一ほどロープで作られた道を進んで来たが、その行く手に大きな結び玉が道路を塞ぐ岩の様に立ち塞がった。

「何、立ち止まっているんだよ！さっさと進むんだよ！」

内田が意地悪くロープを握り締めて上下に揺さぶりながら行った。

「何、ボンヤリしているんだよ！さっさと行けよ！」

山崎が背後から狂ったように晴江の尻に割れ竹の鞭を加えた。

前後から嵐のように割れ竹の鞭を喰らい、意を決した様に進み始めた。

太いロープが晴江の秘裂を左右に押し広げ、大きな瘤のザラザラした表面が晴江の陰核を容赦無く擦り上げた。

この淫猥な画面に視線は釘付けとなりながら、元岡照組の幹部が晴江を責めるシーンに触発された大亜門戸会の娼婦と村崎會の男達が、まぐ合い続けていた。

背後から男達に秘所を抉られながら、自分の股間が大きな瘤で騷られることを想像したのか潤んだ瞳でスクリーンを見つめながらイヤンと甘い悲鳴が上がった。

やっとの思いでロープの結び玉の頂点が陰核を通り過ぎた時、膣孔周り内陰の窪みにすっぽりと瘤がはまり込む様にロープが跳ね上がった。

下から突き上げて来た強い衝撃に、思わずウツと悲鳴を漏らすと眉根を寄せて唇を喰い絞めて堪えた。

しかし、瘤が半分体内に埋められたような痛痒感で、股間を杭で止められたように全く前に進むことが出来なくなってしまった。

何やってやがる！早く歩け！と前後から狂ったように叩きのめされて、漸く我に返ったように苦しい歩みを始めた。女陰の窪みにピッタリと収まっていた瘤は次に弾かれたように菊の座の窪みにスポッと収まった。

その衝撃に再び悲鳴を上げて体を硬くした。

こうして一つ目の瘤を超えて何とか二つ目と三つ目の瘤も超えてロープの端まで達した。

漸くゴールに達したことにホッとしたように、ロープを股間に跨いだまま上体を屈め、ロープを取り付けた壁に頭をもたげて苦しげに息を吐いていた。

「何をノンビリ休んでいやがんでえ！今度は元来た道に戻るんだよ！」

山崎が割れ竹のささらになった先端で晴江の縄で括り上げられた乳房をグリグリと捏ねた。

「ああ・・・もう勘弁して下さい・・・」

目を瞬かせながら気弱に男達に哀願した。

「ならねーっ！折角男勝りの大姐が苦しんでいらっしゃるんじゃないか、拷問に掛けた甲斐が在ろうってもんだぜ！お前さんの悶える姿を見るとちょっとは溜飲が下がろうってもんだぜ！・・・もう少し苦しむ姿を見せて貰いましょうか。」

と言うと、手にした割れ竹でバシッと晴江の剥き出しの腹を叩いた。

ささらになった竹の先端が晴江の腹の上で大きく弾け、派手な音が拷問部屋の中に響いた。

鞭打たれる苦痛に負けて、涙を吸いながら後ずさを始めた。

毛羽だったロープが秘裂を擦り上げ、陰核を下から擦り上げた。

再びロープの結び目の所に達し、今度は逆に肛門部の窪み、膣孔外苑の窪み、クリトリスと順番に責め上げた。

瘤が通過する度に眉根を寄せて苦しげに身悶えた。

スクリーンをじっと見詰める娼婦達も自分が男達から貫かれているのも忘れたように、憑かれた様に画面に食い入り、晴江の身悶えに同調するように体を収縮させた。

こうして一往復が完了し、スタート地点に戻った晴江に男達は、再度進むように命じた。

大声で泣き叫び許しを請う晴江に、男達は不服従の罪を判らせるように激しく打擲を加えた。

何度か往復を繰り返す内に、股間からの刺激が麻痺してきたのか、男達から鞭で追い立てられなくても自発的にロープで作られた道を歩む様になっていた。

全身を紅潮させ、虚ろな目で、意識も朦朧とした様子で何かに憑かれた様に股間をロープに擦りつけて歩む姿が映し出されていた。

ふと晴江の通った後のロープがまるでカタツムリの通った跡の様に濡れ光っているのに内田が気付いた。

ロープを手にして、汗とは違うヌルヌルした粘液がビッショリロープに塗されている事を知り、

「お前は、本当に何て言う淫乱な女なんだ！こんな事でも感じてしまうのか？」

と、呆れた顔で大声を上げた。

「止めた、止めた！お前を喜ばしてもしかたない！」

「さて、何をしてお前の苦しむ姿を見せて貰おうか？」

腕組みして思案する内田の目が、ふと水を満々と溜めた時代劇に出て来る様な杉の大桶に行った。

そうだ、こいつを使って見ようと、手をボンと叩いた。

二人掛かりで晴江の両手両脚に縄を掛けて、拷問室の中に立位の大の字に固定した。

しっかり縄が張られ、晴江が倒れる事が無い事を確認すると、山崎が水を満たした大桶に向かい木の手桶に水を汲んだ。

「ああ・・・もう許して下さい・・・」

晴江が朦朧とした様子で気弱に哀願した。

「何言ってやがる！たっぷりと良い気持ちにさせて貰いやがって！俺たちは、これまで散々お前達に苦しめられた仕返しとして、お前の苦しむ姿が見たいんだ。これからたっぷりと苦しんで貰うぜ！」

残酷な目で晴江を睨み付けると、さあこれを啜えるんだ！と晴江の後ろ髪を引っ張り、大きな漏斗を口にねじ込んだ。

内田が晴江の髪を掴んで上を向かせている間に、山崎が手にした水桶の水を晴江の口にねじ込んだ漏斗の中に流し込んだ。

ゴボゴボという大きな音を立てて漏斗の中の水が晴江の口の中に流れ込んだ。

のど仏が上下して、流し込まれた水の圧力に強制されて、必死に飲み下している様子が分かった。

嚥下能力を超える水が口から溢れ出し、筋となって流れ晴江の体を濡らした。

気道を水に塞がれ悲鳴を上げることも出来ない晴江は体を身悶えさせて嗜虐者達に抗議した。漸く水桶いっぱいの水を飲み下して、気道に回り込んだ水を押し出すように苦しげに咳をした。

そんな晴江の姿にも拘わらず、再び大桶から水桶に水を汲んだ山崎が、股間のモノを隆々と立ち上がらせ、嬉しそうにこちらに向かってくる様子を横目で見て、後ろ髪を内田に握り締められて自由に動かせない顔を震わせ、鼻を鳴らして抗議した。

晴江の抗議に構うことなく、むしろ晴江の苦悶に満ちた顔を嬉しそうに眺めながら、再び手

桶の水を漏斗の中に流し込んだ。

再び遅い掛かって来た大量の水流に白目を剥きながら腹の中に流し入れた。

こうして何度も何度も水を注ぎ入れ、恐らく飲み込めず口から溢れ出した分を引いても優に4～5リットルは腹の中に流し込んだのでは無いかわれた。

縄で繋がれ空中に大の字に固定されたまま、死んだ様にグッタリと項垂れる晴江の姿があった。

死んでいないことは、時々手足を細かく痙攣させることから判ったが、完全に意識を喪失しているようであった。

男達も水責めに疲れたのか、床に腰を降ろし、手を休めてそんな晴江の姿をじっと見ていた。

「おい、やけに腹が膨らんだとは思わないか？」

内田が山崎に問い掛けた。

「そりゃ、あれだけ水を飲めば腹も膨れるだろうよ、まるで蛙の腹みたいじゃないか！」

と、水で膨張した腹を指差して笑った。

二人はフラフラと意識の無い晴江の傍に歩み寄り左右に陣取ると、大きく膨らんだ腹を撫で回した。

二人の手は腹を撫で回すだけでなく、乳房を撫でて先端の乳首を弾いたり、秘所をこじ開けてその内部を楽しんだり、意識の無い晴江の体を弄んだ。

大の字に開かれた大腿の下に回った内田が、溢れ出た水でまるで湯上がりの様にビッショリと濡れて、白い大腿にピツタリと張り付いたままの黒々と艶のある陰毛を丁寧に左右に掻き分け、その奥の肉襞を指で摘んで押し広げ、秘められた内部を観察した。

先程までロープ渡りの拷問により痛め付けられた秘所の柔肉や微妙な襞や陰核の表面が赤く腫れ上がり痛々しく肥大していた。

そんな秘所の一つ一つを指先でなぞりながら悪戯を繰り返した。

「ここの周りもビッショリ濡れてやがるぜ！だけど今度は陰水じゃ無くて本当の水だ！」

秘孔の周りを指で撫で回しながら内田が笑い声を上げた。

ひりつく所を無骨な指先でなぞられる激痛に晴江が意識を取り戻した。

ウーンと声をあげ、完全に意識が戻ると、男達の手を払い除けるように身を震わせた。

「へへ、気が付いたかい？」

意識が無いことを良いことに、晴江の体に纏い付き悪さをしていた男達照れた様に声を掛けた。

「気分はどうだい？腹の中が水でパンパンだろう？・・・聞いた所じゃこの桶の中の水には利尿剤つまりオシッコをしたくなるクスリが溶かし込んであるって話だぜ。そろそろ効いて来たんじゃないかい？」

嫌らしい目付きで晴江の下腹を覗き込んだ。

男達の指摘する通り、体内に注ぎ込まれた大量の水は膀胱に集まり、その出口を求めて内側から尿道孔に狂おしい程の圧力を掛けていた。

腰を小刻みに震わしのつびきならない状況に追い込まれつつある晴江の姿を確認して男達は晴江の下腹を掌で撫で回した。

男達の撫で回す手の下で、膀胱がビクッビクッと収縮を繰り返し、排出を押し止めようとする下腹の筋肉が硬く緊張する様子が分かった。

「何時までも我慢していると体に毒だぜ！」

と言うと、山崎が掌で晴江の下腹をグッと押し込んだ。

下腹から込み上げて来た強い衝撃に晴江が悲鳴を上げた。

「アアッ！痛い！止めて下さい！」

苦痛に耐えかねたように、晴江が頭を激しく振って大声を上げた。

「小便が漏れそうって言うのかい？」

内田の問いに、恥ずかしそうに頭を振って答えた。

「それじゃ、オシッコをさせて下さいーって俺たちに頼んで見ろ！」

内田が薄笑いを浮かべながら苦悶する晴江をいたぶった。

「お願いします。オシッコをさせて下さい・・・」

「はあー？何て言った？声が小さくて良く聞こえなかったぜ」

耳に手を当てながら大げさな身振りで冷酷な笑みを浮かべながら問い返した。

「お願いします！・・・オシッコをさせて下さい！」

ズキズキと股間から突き上げる、激しい尿意に堪切れなくなったのか、堪らず大きな声を上げて哀願した。

広間に集まった男女も後背位でピストン運動を繰り返しながらも目は、画面に釘付けのまま生唾を飲み下して次の成り行きを見守っていた。

「そうかい？そうかい？元敵方の男達の前で小便をする所を披露してくれると言うのかい？」

二人の男が嬉しそうに呟いた。

退っ引きならない状態に追い込まれ、小刻みに下腹を震わせる晴江が顔を真っ赤にして肯いた。

「それじゃそのまま、そこでジャーとやってみな！」

晴江が憤怒の顔で男達を睨み付けた。

「どうしたい？縄を解いてトイレに連れて行って貰えると思ったのかい？畳の部屋なら困るだろうが、どうせ下は石畳だ。漏らしたってどうって事は無いだろう。」

この男達には何を哀願しても無駄なことを覚ったのか、下を向いて唇を噛んだ。

「ちょっと待った！」

山崎が悲壮な決意を決めて落下微塵な姿を晒そうとした晴江に最後の瞬間を押し止めさせた。

「へへ、こんな物があつたぜ・・・」

タコ糸を手にしながらか山崎が卑猥な笑みを浮かべた。

「男勝りの晴江姐さんが折角立ったままシャーと小便をなさるんだ。男の立ちション便の様に派手にぶち撒いて貰おうじゃないか？」

山崎の悪辣な計画を理解した内田が晴江の前に回ると、その閉じられた割れ目の部分を大きく左右に拡げ、その柔褻の合わせ目を、まさ探し出して晴江の太ぶりのクリトリスを指先でつまみ上げた。

「アアーッ！イヤ！」

迫り来る尿意も思わず忘れたかの様に、敏感な女の芽を無骨な男の指先で摘まれ晴江が切なげに腰を振った。

「へへ・・・まるで野苺みたいだぜ？可愛いモンじゃないか？」

内田が指先で木の芽をイヤらしく揉み上げながらか山崎の方を振り返った。

「ああー、やめて・・・」

晴江が体内から突き上げる尿意に責め立てられ切なそうに息をしながら弱々しい悲鳴を上げた。

「何言ってやがる！上の蕾もこんなにとんがらかせやがってよ！」

倒錯した神経のためか、水で体が冷えたためか、乳房の先端で乳首が固く痼っていることを目敏く見付けて山崎が笑った。

「今、もっと良い気持ちにしてやるからな・・・」

内田が先っぽを摘み上げている間に山崎が器用な手付きでその根元をクルクルとタコ糸で縛り上げ、しっかりと結び付けられている事を確認するかのように糸の端をピンと引っぱた。その激痛に晴江が腰をグッと引いて下腹に力を入れたので思わず尿が溢れそうになって腰を悶えさせた。

そんな晴江の身悶えにも構うことなく天井の梁にタコ糸を通すとグイッと引いて結び止めた。タコ糸で女の神経の集中する突起を斜め前に引っ張られ吊り上げられる激痛に、激しい尿意も一瞬忘れたように悲鳴を上げた。

「へへ、こいつは正面から丸見えだぜ！」

タコ糸で女核を吊り上げられ、正面に向けて大きく突き出した陰部を見詰めながら山崎が笑った。

「これだけ前に飛び出していたら、男のように派手に前に向かって撒き散らして呉れる事だろうぜ！」

つられて内田も醜く変形した女陰を指差して笑った。

天井から大股開きの立位に吊り上げられ、更に女の中心部をピン止めするかのように細いタコ糸でクリトリスを吊り上げられ、身動きも出来ず晴江が苦痛に身悶えさせていた。

陰核の根元を縛り上げたざらつく細い糸がジンジンするような疼痛となって敏感な女の神経を襲うのか、ビクリビクリと周期的に小さく股間を痙攣させた。

その苦痛に悶える姿が最高の酒の肴とでも云う様に二人の男が嬉しそうに酒を酌み交わしていた。

「アアー、イヤ！」

晴江が汗に濡れ顔を左右に振った。

「へへ、とうとう始めやがったぜ・・・」

最初の内は、自制する様に、チョロチョロと静かに大の字に開き切った股間から漏れ始めたが、次第に抑えが効かなくなってきたのか、強い水流となって溢れ出し、弾けるように尿道孔から噴出し、放物線を描いて石畳で弾け飛んだ。

溜まりに溜まっていた物を一機に噴き出す様に、今や激しい勢いとなり、尿道の周囲から溢れ出た小水が滝の様に股間を伝ってこぼれ落ちていた。

そして、塩分を含んだ小水がロープで擦り付けられ腫れ上がった秘所を濡らして刺激するの

か、放尿しながら苦しそうに身を揉み、身悶えたことにより豆吊りにされた糸による激痛を誘発し、ヒイヒイと泣きわめきながら腰を激しく振るわせた。

激痛に煽られ下半身が前後に乱れ動いたため、体内から噴き出した液がまるで波のように上下に揺れながら撒き散らされた。

その晴江の体内から飛び出した液体がまるでホースで水撒きする様に上下に揺れ動く様子に男達が笑い声を上げた。

「随分激しく出すじゃないか？」

まるで水を詰めた袋の破れ目から水が激しく噴き出す様に、秘裂を内側から割り裂いて飛沫を上げて幾筋もの線を描いて排泄する姿に目を丸くして笑い声を上げながら見入った。

爛れて何倍にも腫れ上がった肉壁が尿道孔を塞ぐのか、一部の小水が跳ね返り、在らぬ方向に水飛沫を飛ばし、大腿からも幾筋もの筋を引いて川のように流れ落ちていた。

「腫れ上がった部分にオシッコが掛かって、痛くて仕方無いんだろう？どれもっと楽に出せる様にしてやろうか？」

晴江の落下無残な姿を肴に酒を酌み交わし始めたばかりの二人であったが、山崎がドッコイショと腰を上げると、晴江の背後に中腰に腰を降ろした。

そのまま両手を前に回すと、晴江の秘裂を左右に押し広げた。

いっぱい左右に押し広げられ、隠れていた女の源泉部分が露わとなり、華洞の直ぐ上に開孔した大きく口を拡げてレモン色の液を放出する緋色の排水口が画面に大写しとなった。

今は遮る物が無くなったので、小水は一条の水柱となって迸り出る様になった。

山崎が背後から晴江の腰を前に押し出したので、股間から噴き出した物は、斜め上に放物線を描いて飛び、まるでホースで水を撒いた様に拷問部屋の中を濡らしていった。

「へへッ！まるで小便小僧の様じゃないか？」

「小僧じゃ無くてババアだろ？小便^{ばばあ}婆だぜ！」

「へへ、違げーねーや！」

男達は晴江の痴態に笑い転げるのであった。

やがて体内の圧力が弱まって来たのか、放出の勢いは徐々に弱くなり、足下をビチャビチャと濡らすだけになっていた。

「どうした？もうお終いか？」

内田に声を掛けられた晴江がモジモジと腰を振った。

最初の放出により膀胱内の圧力は、一端下がった筈であるが、大量に体内に流し込まれた水分は出口を求めて、第二弾となって新たに膀胱に流れ込んでいるようであった。

「アアーッ・・・また出ます！」

新たに込み上げて来た尿意に顔を真っ赤にして、腰を振った。

「良いとも、良いとも、どんどん出しねえ。」

山崎が背後から笑いながら声を掛けた。

再び大量の放出を始めた晴江に、

「随分出るじゃないか・・・」

と、面白そうに大量の放水する姿を眺めていた内田が、

「そうだ！面白い事を考えついた！」と、腰を上げた。

そして、晴江の水責めに使用した手桶を手にすると晴江の傍に歩みよった。

「そら、この中にするんだ！」と手桶を晴江の股間に押し付けた。

「アアッ！イヤ！」と手桶を避けようと腰を揺すったが、山崎に動きを封じられ、一度始めた放水を途中で止める訳にも行かず、手桶の中に体内に残された尿を注ぎ入れた。

手桶の中には泡を立てて晴江から流れ出た物が溜まって行った。

「へへ・・・随分溜まっていたものじゃないか？」

手桶の三分の一程を満たした小水を眺めながら二人の男が楽しそうに笑い声を上げた。

最後の一滴まで搾り上げた手桶を手にした内田は、

「折角お前から搾り取った物じゃないか。良く味わって飲んで貰おうか。」

と、手桶を晴江の顔の前に持って行った。

怯えた目をして悲鳴を上げながら狂った様に首を振り続け狼狽する晴江の様子を男達は、面白そうに眺めた後、背後から山崎が後ろ髪を掴んで顔を上に向けさせると鼻を摘んで口を開かせた。

そして、その開いた唇に内田が手桶を押し付けた。

「自分の出した物じゃないか。ゆっくりと味わって飲んでみな・・・」

と手桶を傾けて、口内にゆっくりと注ぎ込んだ。

「溢すんじゃないぞ！そうだ！その調子で全部飲み干すんだ！」

喉がゴクゴクと上下する様子から晴江が自分の排泄した物を飲み下している様子が在り在りと分かった。

スクリーンを見詰める女達も、不潔なモノを飲み下す様子に自分が尿を飲み込む様子を連想

したのか、男達から体を貫かれているのを忘れて、思わずゲーゲーと空の嘔吐をし始めた。

「へへ、本当に全部飲み下しやがったぜ！」

男達が驚いた様に空になった手桶を見詰めた。

「こうなりや、ついでに俺たちの物も飲ましてやろうか？」

二人は手桶を床に置くと、自らの持ち物に手を添えて、手桶の中に放出始めた。

「へへ、汚ね一色してやがるぜ！それにこの臭いはどうだ！」

日頃不健康な生活をしているためか、褐色じみた濃色をした二人の排泄物が混じり合った不潔な液体を眺めて笑い合った。

「そら！飲むんだ！」

二人の尿で半分近く満たされた手桶を晴江の口に押し付けた。

自分のものと違う異臭のする強烈な味覚の物を口内に注ぎ込まれ、眉根を苦しそうに歪めて、ウンウンと呻き声を上げながら、汗を浮かべ、込み上げる嘔吐を押さえ込んで必死に飲み込もうとする姿が映し出された。

「流石は、目高組の大姐だ、良い飲みっぷりじゃないか？」

脂汗を浮かべ白目を剥きながら、死ぬ思いで喉に流し込もうと努めている晴江の姿を男達は面白そうに眺めた。

嗜虐の快感に酔う男達の股間のモノは高く上に突き上げていた。

「へへ、お見事、お見事、見事に飲み干したぜ！」

手桶に満たされた不潔な飲み物を無理矢理飲まされて苦しげに肩を上下させる晴江を見ながら、手桶の中の液体が全て無くなっていることを確認して歓声を上げた。

死ぬ思いで何とか飲み干した後も口腔内に残る異臭に苦しめられているのか、顔を蹙めて、肩で息をする晴江の姿に、

「へへ、俺たちの物はそんなに不味いか？どうやらお気に召さなかったようだな？・・・お口直しに、もう一度大桶の水をご馳走するぜ！それで口の中に残ったものを洗い流せば良いだろう？」

二度の大量の排泄で漸く落ち着きを取り戻し始めた体を再び水責めに掛けようとする男達に恐怖の目の色を浮かべて必死に首を振った。

そんな狼狽ぶりも気にする様子も無く、再び悲鳴を上げる晴江の口に無理矢理漏斗をねじ込

み、手桶に汲んだ水を流し込み始めた。

晴江の悲痛な呻き声も無視して、容赦無く立て続けに何杯も手桶で流し込まれ、再び下腹が大きく膨らみ始めた。

最前の大排泄で尿路が緩み、もう堪える事が出来なくなった晴江の股間から再び小水が溢れ始めた。

内田が背後に回ると、猛々しく隆起した股間の物を晴江の秘裂に押し当てた。

そして、そのまま腰をグッと前に突き出すと、排泄を続ける尿道孔の僅か後の秘孔に力尽くで押し入れた。

「へへ、俺のチンポコの前を凄い勢いで渦を巻いて流れていくのが判るぜ！」

内田の堅く隆起した陰茎が挿入され、尿路がいびつに狭められたため、水道のホースを搾るように放出した温水が尿道孔で歪に弾け飛び、睾丸を伝って股間に達し、両大腿を洗う様に流れ落ちていたが、晴江の尿に濡れていくことも気にならない様に、あるいはその暖かい聖水の洗礼を気持ち良く受け止めているように内田は腰を使った。

立位のまま背後から晴江を抱き締め、根元をタコ糸で縛り上げられ充血した陰核の先端を指でそろりと撫でて悲鳴を上げさせたり、放出の圧力を一層増す様に、時々下腹をグイッ両手で押し込んだりして晴江を苦しめた。

背後から突き立てたまま、晴江の排泄の圧力によりもたらされる振動のような心地良い感触を自らの陰茎に感じて恍惚の表情を浮かべる男がいた。

「アアーッ！苦しい！もう駄目です！」

晴江が脂汗を流し、蒼白となった顔を激しく振り立てながら、身悶えた。

「へへ、冷たい水を何杯も飲まされて腹が下って来たんだろう？さっきから腹がゴロゴロしているぜ！」

内田が背後から下腹を撫でさすりながら問い掛けた。

「良いぜ！この際だ、好きなだけ小便でも糞でもさせてやるぜ！」

晴江の肉洞から自分のモノをスポッと引き抜くと、慌てて横に飛び退いた。

ウッと声を上げて体を痙攣させると、ビビッと布を引き裂く様な大きな音を立てて、褐色の便が背後に飛び散った。

その最初の凄まじい爆発に続き、決壊した出口からドロドロとした液状便が足下にこぼれ落ち飛沫を上げた。

スクリーンを見詰める男達がオオッと大きな声を上げ画面に目が釘付けとなり、女達が悲鳴

を上げて目を背けた。

「へへ、これは良いや！前からション便、後から水便だぜ！」

大股開きの豆吊りにされた惨めな姿のまま、憎い男達の面前で前と後から排泄をするという落下無残な醜態を晒す女の姿を肴に嬉しそうに二人は酒を酌み交わした。

最初の放出の勢いを失った後も、強制的に注入された大量の水分は、今は、黄褐色の汚物に姿を変えて何時までもボタボタと足下に落下を続けていた。

命に危険な程、水を飲まされた体を健常の状態に戻すべく腎臓がフル稼働して、体内の水分を尿として排泄し、更に腸からも水便となって水分を放出しているようであった。

体内から突き上げる狂おしいまでの圧力に晴江の両排泄孔は、麻痺してそれを閉じる機能を失ってしまったのか、抑えることも出来ず、ダラダラと力無く何時までの両の穴から放出を続けるのであった。

「前は目高組の女親分ですーなんて顔して偉そうにふんぞり返っていやがったがお前も惨めな女に落ちぶれたたモンだな！」

顔を真っ赤に染めて羞恥に身悶える晴江を肴に山崎が笑いかけた。

「男の目の前で豆吊りにされたまま立ちションと立ちグソなんて、まともな女なら出来ない芸当だぜ！恥ずかしくないのか？背中のお観音様の刺青が泣いているぜ！」

晴江の屈辱感を抉り上げる様に酒に酔った内田が毒突くのであった。

男達の目の前で醜態を晒す羞恥の為か、敵対していた男達の前に惨めな姿を晒す悔しさのためか、空中に大の字の立位の姿を晒したまま、大粒の涙を流して鳴き出した。

そんな哀切を帯びた女の姿もこの男達に取っては心地良い風景なのか、一おやおや、水を飲みすぎて、今度は目からも水を溢し始めたぞ！一と、互いの肩を叩いて笑い合うのであった。

「岡照組を滅ぼして俺たちを路頭に迷わした罪滅ぼしのために、これから晴江姐さんの稼ぎの中から俺たち二人に毎月100万円の慰謝料を払ってくれると剛沢親分が約束して下さったぞ。これから晴江姐さんのお陰で毎日旨い酒が飲めるってもんだぜ・・・」

何時果てるとも無く、栓の抜けた水槽の様に前の穴と後の穴から力無く排泄物をビタビタと垂れ流し続ける女の姿を前に酒を酌み交わしゲラゲラ笑い声を上げながら見続けていた・・・

ここでビデオは終了し、スクリーンは明るい光条だけとなった。

スクリーンに見入っていた男女は、散々に掻き立てられた欲情を抑え切れなくなったように

畳の上にもつれる様に体を横たえると、狂った様に互いの口を激しく吸い合い、獣の様に互いの体を食い合った。

十分な肉体調教を受けた晴江達と比較すると、どうしようも無い粗マンであったが、晴江の陰虐なビデオで性欲を極限まで掻き揚げられた今の男達に取っては、そんなことは、もうどうでも良いことであった。

理性を失った男達は、荒い息を吐き、狂った様に激しく腰を前後に突き動かした。

荒々しいまでに燃えさかる欲情に理性を失った女達も悲鳴のような嬌声を上げて、狂ったように腰を振り、男のモノを深々と迎え入れた。

男達が溜まりに溜まった思いの丈を娼婦の体内に一機に放出して一心地付いた頃、次のビデオが上映され始めた。

晴江の凄惨なビデオに続いて上演されたのは、暁美のビデオであった。

暁美の前に客として現れた男は、藤田という男であった。

暁美が女子高生の時に大学を卒業したばかりで赴任して来た新米教師であったが、教師としての自覚に欠ける所があって、暁美の美貌に夢中になり執拗に交際をせがんで来たことがあった。

少年時代からスポーツ万能の男であり、数々のスポーツ大会でも優勝や上位入賞した経験を持ち、幾つかのプロチームからのスカウトもあったが、そのモデルの様な爽やかな顔立ちと人気に注目した学校経営者達が教員免許を取得していることに目を付け、学園の広告塔にするべく金を積んで、暁美のいる女子高の体育教師になったと噂されていた男であった。

青春期を通して、常に周囲の女生徒や世間の若い女性からから注目を集めて来て、たとえ自分に興味を示さない素振りをする女が居ても自分が一声掛ければ、必ず自分の物になったーと、いう環境で中学、高校、大学時代を過ごしたためか、プレイボーイ気取りで妙に女に対して馴れ馴れしく高慢な所がある男であった。

先輩の教師の間でもその男の態度に鼻白む者も多かったが、経営者肝いりの教師であったので、見て見ぬ振りをしていたのだった。

暁美の級友の女生徒の中にはスターの様な端正な顔を持ち精悍なスポーツマンタイプのその教師に憧れを抱く者も多くいて、実際その教師と肉体交渉を持ったと噂されている生徒も何人もいたが、幼い頃から血腥い荒くれ男の中で育った暁美に取っては、理想の男性は自分の父の様に男臭い強い男性であり、浮ついた素振りで、女性をなめきった様な高慢な態度を示

す男は、生理的に嫌悪感を抱くタイプであったので、きっぱりと交際の申し込みを拒絶したのであった。

しかし、その新米教師にしてみれば、女から無視された事は、生まれて初めての経験であったので、プライドを大きく傷付けられたのか、何としても暁美のことを落としてやる！と、その後ストーカーのようにしつこく付きまとって来たのであった。

暁美の両親が知れば、この男が無事に済むはずが無い事は分かって居たので、流石に可哀想に思い、学校にも告げず、両親には知られないようにしていたが、ある日無理矢理、体を求めて暴行未遂に及び、とうとう学校の知る所となった。

生徒集めのための広告塔として特別に採用した男であったので、これまで生徒との女性問題を耳にしても見て見ぬ振りをしたり、強引にもみ消していたのであるが。最早かばいきる事は出来なくなって、この教師を早速懲戒解雇したが、結局、晴江の知るところとなり、『ヤクザの娘がカタギの男から恥をかかされたまま黙っていたらヤクザ仲間から笑い者になる！』と、晴江の命令を受けたチンピラ達により壮絶なリンチを受けた後、行方が判らなくなっていた男であった。

東京の体育大学を卒業して新任教師として赴任して来た時のスポーツ万能教師として陽に焼けた精悍な顔は最早無く、病的なまで青白く皮膚の艶の無くなった痩せ細った顔には、あの時のリンチの跡か消える事の無い深い傷を幾つも浮かべ、まともに歩く事も出来ないのか松葉杖を頼りに脚を引きずって、暁美の傍にやって来た。

余りの変貌ぶりに最初暁美は誰だか判らなかったようであったが、男が暁美に二言三言言葉を掛ける内に、ふと記憶が蘇ったようであった。

そして、見る見る顔色が青ざめ、ガタガタと震え出した。

前途有望であった若者をこのようなカタワ者にしてしまい、男がその恨みを自分にぶつけて来るに違いないと思った様だった。

ご免なさい！ご免なさい！と必死に頭を下げ男に謝り続けた。

「別に謝る事は無いさ・・・」

藤田が暁美の下顎を手で支えて、恐怖の色を浮かべる暁美の目を覗き込みながら呟いた。

「逆に、今の境遇になったことに感謝している位さ！・・・教師という聖職じゃ娼婦を買うことも出来ないからね。もう教師じゃ無いんだから買春しても構わないだろう？」

目に淫靡な光を浮かべながら、静かに話掛けた。

「奈和も今じゃ唯の売春婦、そして俺はお前を金で買った唯の客だ。客が売春婦に淫らなことをしても何も問題は無いだろう？」

と、粘っこい陰湿な目で暁美を見詰め、舌をベロッと出して薄い唇を嘗めながら話し続けた。暁美は以前から何故かこの男を生理的に好きになれなかったが、今日の前に醜く変貌した男を迎え、まるで得体の知れない爬虫類に見詰められているような不気味なものを感じている様子であった。

「この前は肝心な所で油断して、逆にお前のパンチをまともに受けて気を失ってしまったが、今回は娼婦と客だ。お前に何をしようと誰も邪魔に入るヤツなんか居ないさ・・・」

男の瞳の奥に残酷な光が輝くのを見て、恐怖が込み上がって来て、反射的に体を後に退かせた。

「先ず身に付けている物を脱いで、お前の綺麗な裸を見せて貰おうか」

藤田はドカッとソファに腰を降ろして、不安そうな目の色をして、目の前に佇む暁美に命じた。

その日の暁美の装いはシルクサテンのブルーのチャイナドレス姿であった。

自分に恨みを持つ男に裸身を晒すことに恐怖にも似た羞恥を感じているのか、男の目の前で怖ず怖ずと身悶える暁美であったが、娼婦の身で客に逆らう事は出来ないと諦めたのか、男と視線を合わせない様に下を向きながら、ワンピースの肩紐を外した。

光沢のある青いシルクの布が、滑らかな若い肌の上をまるで水が流れ落ちるように、滑り落ち、静かに足下に外輪を築いた。

「ほおー！下はノーパンか？」

藤田が全裸の体を晒す暁美を注視して、思わず感動したような声を上げた。

スリットの深いチャイナドレスを着る時は、パンティの着用は禁止されており、ドレスの下には一切の下着を着けていなかった。

今暁美の身に付けている物は、ラメの入った赤いピンヒールと首元の真珠のネックレスだけであった。

女子高時代の教師に裸身を見られる事を恥じる様に、右手で股間を押さえ、左手で豊満な胸を隠して少しでも男の目から逃れるように体を折った。

「何を隠しているんだ。胸をシャンと張って、両手を退けて、そのでかいオッパイと股間の物を先生に見せて見ろ！持ち物検査だ！」

偉そうに脚を組んでソファにもたれながら藤田が命じた。

藤田に命じられるままに、逆らう事も出来ず、背を真っ直ぐに伸ばし、両脚を肩幅に開くと、胸と股間を覆っていた手を退かせた。

豊満な乳房と綺麗に刈り揃えられた下草に被われた秘所がソファにふん反り返って座る男の目に露わとなった。

プロのファッションモデルの様な完璧に均整の取れた女体が男の目の前に在った。

無駄な肉の付いていない胸にはそのスリムな体型に反して、形の良い紡錘形の大きな乳房が前に向かって飛び出し、腹周りのくびれから腰周りに向かって続くなだらかな曲線が理想的な女性のシルエットを形作っていた。

そして、左右に良く張った腰部の中心には艶めかしく縮れた春草が繁茂していた。

藤田は目の前に据えられた暁美の艶めかしい裸身に心を奪われて、濁った目で生唾を飲み込みながら全身を眺め続けていた。

長年憧れ続けた美女の裸身に陶然となりながら、艶やかな春草に覆われた秘所をソファから身を乗り出すように体を前屈みにして凝視していた。

「何をしている、良く見えんぞ！指で開いて股の間の奥の奥まで見せるんだ！」

ああっ、イヤ、と、以前担任教師だった男の目に秘裂を晒す羞恥に身悶え、涙声になりながらも、命じられるままに、両手の指で柔毛を掻き分けた。

そして、怖ず怖ずと白くてしなやかな指先で柔らかな肉の襞を左右に押し上げ、その秘奥を野卑な男の目に晒して行った。

自らの指で秘裂を割りながら、これまでの客に感じたことの無い羞恥心に襲われ、ブルブルと身体を震わせながら全身を赤く染めて、イヤ、イヤと小さく悲鳴を上げ続けた。

その扇情的な姿に、藤田が杖を頼りに暁美の足許まで這い寄って来た。

まるで息が掛かる程近くまで這い寄り、左右に大きく上げられた羞恥の中心をマジマジと覗き込むかつての教師に恐怖の様なものを感じている様子であった。

「貴様、女子高生のくせにこんな大人の女みたいな熟れたオコを持ちやがって！大方近くの男子校の生徒のモノを散々そこに咥え込んでいたんだろ？一体これまでに何人の男とやったんだ？」

節くれ立った指先をその中心に押し当てながら、なおも質問した。

「いったい何人の男をお前の汚いに咥え込んだんだ？！」

「百人以上です！」

執拗な指先の責めに堪えかねた様に、これまでの調教と売春を通して、自分の体を通して行った男の数を叫ぶ様に応えた。

「何！百人以上だと！・・・お前はどうしても無い淫乱女子校生だな？そんな悪い生徒はお仕置きしないといけないな・・・」

錯乱した様に見える藤田の頭の中では完全に女子校の教師時代に戻っているのか、まるで先生と生徒のような口を聞いた。

「まあ良い！早くこれを着るんだ！」

と、言うのとビニール袋に入った物を投げ付けた。

ビニール袋から出て来たのは、曉美が通っていた女子校の制服であった。

夏の制服で、半袖の白いセーラーシャツと紺の膝丈のスカートと白いソックスが入っていた。かつて通っていた名門女子校の制服を投げ付けられ、複雑な表情を浮かべたが、この不気味な男に何時までも裸身を晒すよりましと、与えられた制服に袖を通した。

下着も無く、裸身の上に直接着た制服は、ふたサイズほど小さいようで、曉美の体格に比べて余りにも小さく、体をコルセットのように搾り上げ、豊かな胸を前に突き出す様に括り上げた。

又、スカートも規定より短いようで、曉美が着ると膝上20センチ程しか無く、身を動かす度にスカートの下から何も隠す物の無い股間がチラチラと見えた。

白い靴下と襟の赤いリボンを身に着け終わり、成熟した女の体の線がクッキリと見えるピチピチの制服に包まれた曉美の姿を藤田が粘っこい目で上から下まで嘗める様に見詰めた。

ビデオを見詰める男女も、或種妖艶な曉美の女子校生姿に目を見張った。

短いスカートの裾からミルクの様に真っ白い太股に入れた一輪の赤い薔薇の刺青が目に入り、妖しげな気配を漂わせていた。

藤田は刺青の施された曉美の内股を撫でながら、「こんな所に刺青を入れやがって・・・お前は本当にどうしても無い不良女子高生だな・・・」と、淫猥な笑みを浮かべながら呟く様に言った。

「どうした？制服が少し小さかったみたいで息が苦しそうだな？」

まるで水着かレオタードの様にピッタリと身体の線を露出するセーラー服姿を眺めながら藤田が卑猥な笑みを浮かべた。

「息が苦しいんじゃないか？どうだ？」と聞きながら、セーラー服に押し潰される様に前に突き出した胸の膨らみを両手で驚握みにして揉み上げるのだった。

「ああ・・・止めて下さい！苦しいです！」

この不気味な男に胸を揉みしだかれる気味の悪さに堪り兼ねた様に、身を振って叫び声を上げた。

「そうか？苦しいか？」

ゾッとするような笑みを浮かべると、大きな裁ち鋏を手にとした。

ピチピチに肌に張り付いたセーラー服であったが、乳房の上の部分を持ち上げ、何とか鋏が入るスペースを作った。

「動くな、怪我をするぞ！」と、楽しそうに唇を歪ませてセーラー服の胸の部分をジョッキジョッキと鋏で切り進み乳房の丁度上の部分に丸い穴を開けた。

一つの穴が完成すると同じように反対側にも丸い穴を開けた。

そして、その穴に手を突っ込むようにして、乳房を驚握みすると、その丸い穴を通して無理矢理、表に乳房を引っ張り出した。

暁美のFカップを超えそうな巨大な乳房はセーラー服に開けられた狭い丸い穴に^{くび}縊り上げられた様に前に突き出していた。

片方の乳房を引きずり出すと、同じようにもう片方の乳房も引きずり出した。

二つの大きな乳房の根元がセーラー服に開けられた小さな穴に締め上げられるように前方に飛び出し、その先端に可憐な乳首が突き出していた。

名門女学校の制服がまるで乳房狭窄用のボンデージスーツの様な形となり、根元を締め付けられてゴム風船の様に巨乳を前に突き出す、卑猥にして滑稽な姿に、スクリーンを見詰める女達が手を叩いて笑った。

「どうだ？これでもう息苦しくは無いだろう？」

恐怖と緊張感で荒い息を吐き、胸を大きく上下させて呼吸する暁美のパンパンに張った乳房をイヤらしい手で撫で回しながら聞いた。

「はい・・・」

虫唾が走るようなイヤらしい手で、剥き出しの乳房を撫で回され鳥肌を浮かべながら応えた。

「良し！それではこれから授業を始めよう！先生は保健体育の担当だから最初は保健の時間だ！」

少し精神が錯乱しているのでは無いかと外観から見受けられるこの元教師は得意そうになって喋り始めた。

黒板を指し示す時に使用するような銀色に輝る指し棒を手にして、その指し棒の先端で暁美の剥き出しの乳房の上を円を描くように撫で回した。

そのイヤらしい感触に暁美の身体がピクッと痙攣した。

「ほら！奈和、今先生が撫でている部分を何と言うか答えてみろ！」

「・・・ああ・・・暁美のオッパイです！」

屈辱感と戦いながら必死になって答える暁美の様子に満足した様に、指し棒を前の方に移動させると、

「それじゃ、この部分は何と言う？」と、尖った指し棒の先でツンと前に突き出した桜色の乳首をツンツンと弾きながら聞いた。

「・・・乳首です」

「それじゃ乳首は、英語では何で言う？」

「・・・・・・・・」

暁美が答えあぐねている様子にニヤリと不気味な笑みを浮かべると、

「英語ではニップルと言うんだ！」と、大きな声を上げて、指し棒の端に取り付けられたドングリのような形をした尖った先端で暁美の乳首の中心の窪んだ部分にグリグリとこじ入れる様に棒に先端を押し込んだ。

乳首の窪み中に金属棒の先が埋め込まれる激痛に悲鳴を上げた。

指し棒の先端が乳首の中に半ば没した事を確認した藤田が指し棒の根元に付けられたスイッチをカチッと押した。

その瞬間暁美が声に成らない悲鳴を上げて、反射的に身体を仰け反らした。

指し棒の先端から高圧電流を乳首の中に注ぎ込まれたのであった。

「出来の悪い生徒には直ぐにお仕置きを据えるからな・・・」

突然の電撃に悶え苦しむ様子に、気味の悪い薄笑いを浮かべて呟く様に言った。

「それじゃ・・・次だ・・・」

藤田の手にする指し棒が胸の谷間を通過して下に向かってシャツの上を撫でて行った。

指し棒がゆっくりと通り過ぎる間、電撃の恐怖に怯えた暁美の身体がブルブルと震え続けた。

短すぎる夏用のセーラーシャツとスカートの間は大きく隙間が空き、まるでセパレートの水着の様に柔らかな腹が露出しており、その中央に形の良い臍が見えていた。

良い物を見つけたという様に、ニヤッと薄笑いを浮かべると、指し棒の先が止まった。

そして、剥き出しとなった臍の中にグリグリと指し棒を押し込んだ。

微妙な神経の集中する柔らかな腹の祠を指し棒で抉られて、アアッー痛い！と身を揉んで悲鳴を上げた。

「奈和、これは何だ？」

「アアッ・・・痛い・・・それは暁美の臍の穴です・・・」

「そうか臍の穴か・・・」

フフッと含み笑いして呟いた。

「それじゃ、臍は英語で何て言うんだ？」

「・・・」電撃の恐怖に心が混乱する中で、何かを答えなければならないと口をモグモグとする間に、遅いと言う様に電撃のスイッチをカチッと押した。

臍の穴の薄い皮膚を通して高圧電流が腹の中に流れ込み、暁美の身体が弾かれる様に床の上に倒れ落ちた。

「英語ではネーブルと言うんだ！お前、出臍じゃなくて良かったな・・・」

これまで長い間手を出すことが出来なかった女を自由にいたぶることが出来る快感に酔っているのか泣き笑いの顔をしたまま、狂った様に高笑いをした。

すっかり嗜虐の快感に酔い痴れて、恐怖の指し棒を手にして、青白い顔にへらへらと痴呆の様な不気味な笑みを浮かべながら、床の上に倒れ込む暁美の傍に近寄って来た。

床の上に尻餅を着く様に倒れ込む暁美の股間に手にする指し棒の先を近付けた。

涙を一杯に浮かべた暁美の目に恐怖の色が在り在りと浮かび、イヤイヤと小さく悲鳴を上げながら、指し棒の先端から逃れる様にジリジリと後ずさりした。

倒れた時に捲れ上がった丈の短いスカートの下から剥き出しの股間が仄暗い内部を見せていた。

まるで蜥蜴の様に冷たい目で、その春草に被われた部分にじっと視線を落としていた藤田は、
「股を開け・・・」と、視線を落とさず乾いた声で命令した。

次の折檻の場所を知らされて、暁美が涙を流しながら、イヤイヤと激しく首を振った。

スクリーンを見詰める娼婦達も次の残酷なシーンに期待して、生唾を呑み込みながら食い入る様に画面を見詰めた。

「股をガバッと開けと言ってんだよ！」

急にぞんざいな声を上げると、大声で泣きじゃくるだけで、何時までも股を拡げようとしな
い暁美に業を煮やした様に、邪険に太股を蹴り上げて股間を開かせた。

綺麗に無駄毛を処理されて刈り揃えられた陰毛の下に柔らかく肥大した陰唇により形成され
たクッキリとした深い谷間が、スクリーンの上に大映しになった。

無理矢理こじ開けた股間の間に片膝を付くと、ソロソロと下腹に沿って指し棒の先をなぞら
せた。

恐怖に泣きじゃくる暁美に斟酌する素振りも無く、藤田は指し棒の先で柔らかい春草を掻き
分ける様に左右に払った。

剥き出しになったクリトリスの表皮を剥き上げる様に指し棒の先端で押し上げた。

顔を両手で覆って泣きじゃくる暁美の身体が電撃の恐怖にピクッと硬直した。

村崎會の男達も娼婦達も目を爛々と輝かせて、声も上げずにスクリーンに見入った。

「奈和のオシッコする孔は何処だ？」

指し棒の先で柔らかな肉襞をこじ開けながら、淫靡な光を目に宿しながら藤田が呟いた。

「フフ・・・此処か？」

左手の指先で秘所の花園を覆い隠していた襞をゆっくりと開くと、その奥に男を快楽に誘う
鮮やかな色彩に染められた肉洞の入り口が姿を現した。

そして、その僅か上に小さな笑窪の様な窪みを発見してニヤッと狂気を帯びた薄気味悪い笑
みを浮かべたのだった。

藤田は、その小さな窪みに指し棒の先を押し付けると、グリグリと揉み込む様にその小さな
孔の中に指し棒を埋め込んで行った。

「アアッ・・・痛いわ！許して！お願い！」

小指の先程も無いさして太いとは云えない棒の先端とは云え、本来物など入れる筈も無い狭
小な肉の管に金属物を押し込められる気味の悪い疼痛感に暁美が腰を振るわせ身を揉んで悲
鳴を上げた。

暁美の悲鳴にも斟酌する様子も無く、ドングリの様な形状をした指し棒の先端をしっかりと
尿道孔の内部に埋込み終わり、プックリと膨らんだ肉孔から、まるで長いステンレス棒が生
え出している様に見えた。

「奈和、今指し棒はお前の小便の孔の中に入っているぞ！小便は英語で何て言うか行って見
ろ！」

ゾッとする様な残酷な笑みを浮かべながら質問をした。

「アアッ！怖いわ！アアッ！解らないわ！アアッ！お願い！助けて！・・・」

無防備な肉体の内部に高電圧を放出する電極を埋め込まれて、何時襲い来るかも判らない激
烈な電撃の恐怖に錯乱して、激しく顔を左右に振りたてながら泣き叫び続ける暁美の姿があ
った。

そんな泣き叫び身悶え続ける暁美の姿に薄ら笑いを浮かべながら、指し棒の根元に取り付け
られたスイッチに指を置いた。

カチッとスイッチを押す音と共に、ギャッと悲鳴を上げて暁美の身体が蝦の様に仰け反っ
た。

スクリーンを見詰める男達からオオッ！と言う声が上がり、女達は思わず口を押さえてキャ
ッ！と悲鳴を上げた。

「ハハハ！・・・気絶したか・・・」

高電圧を尿管を通して膀胱まで注ぎ込まれて、口から泡を吹きながら白目を剥く暁美の様子
を確かめながら、これまで手の届かなかった美女を自由に蹂躪出来たという快哉に、身体を
大きく揺すりながら狂った様な高笑いをした。

電撃のショックで緊縮して指し棒の先端を固く咥え込んだままの尿道から、乱暴に指し棒を
引き抜くと、まるで酒樽から栓を抜いた様に小便が噴き出した。

「ワハハ！まるで噴水の様だ！」

何時までもレモン色の液を吐出続ける意識の無い暁美の姿を見詰めながら、顔をクシャクシャ
にして目から涙を流しながらゲラゲラと大声を張り上げ笑い声を上げた。

そんな狂気を帯びた元教師の姿にスクリーンに見入る娼婦達是不気味なモノを見る様な恐ろ
しそうな顔を浮かべた。

あまりの激痛に気を失って身動き一つしない暁美をじっと見ていた藤田は、そのしどけなく
開いた儘の無防備な股間の佇まいに劣意を掻き立てられたのか、荒い鼻息を吐き、着ていた
衣服を手早く脱ぎ始めた。

かつては健康な肉体に恵まれていたであろう身体は、げっそりと痩せこけ身体のあちこち
にはヤクザから受けたリンチの跡が消える事の無い醜い傷跡が残っていた。

下着も全て脱ぎ去り、全裸となった藤田は意識を失いグッタリとしたままの暁美の両足首を

掴むと思いきり左右に割り拵げ、下卑た目付きでその中心の様子をジッと眺め回した。

乾いた唇を舌で舐め回し、生唾を呑み込みながら、これまで幾人もの男の精を受け入れ、しっとり柔らかく肥大した肉の花弁が形作る女の中心を食い入る様に見詰めた。

そして、両脚首を握り締めたまま憑かれた様にその中心に顔を押し当て、ピンク色を帯びた花弁の発する甘美な香りを鼻腔の奥まで流し込んだ。

しっとり脂肪を載せた柔らかな大腿に頬ずりしながら幾度も股間に鼻先を押し当て、舌を延ばしてその華肉の味覚を楽しんだ後、荒い息を上げて痩せた身体を曉美の上に預けていった。

自らの股間を曉美の大きくはだけられた陰唇に押し重ねて何度か摩擦運動をした後、苛立たしげに、

「糞！立たない！」と、悲痛な面持ちで叫んだ。

藤田が曉美から身体を離れた時、その股間からはダラリとだらしなく肉茎が垂れ下がっていた。

股間から垂れるそのグロテスクなモノは、根元の部分から切断された後、縫合した醜い傷跡が残っていた。

藤田をリンチに掛けたヤクザ達により切り落とされた後、医者により縫合手術を受けた傷跡であった。

「もう二度と女に悪さしないよう切り落としてやるぜ！」周囲を取り囲むヤクザ達が残忍な笑顔を向けた。一人の男がダラリとした陰茎を摘まみ上げ、その根元に匕首を押し当てた。

ギャーと悲鳴を上げた藤田が、ハッとした顔で現実に戻った。

一瞬、暴行を受けて身動き出来ない自分に群がったヤクザ達が面白がってゲラゲラ笑いながら匕首で切り落とした時の恐怖が蘇ったのだった。

苦しそうな表情を浮かべ眉間に皺を寄せた。

「医者はすっかり治っている。勃起しないのは精神的なものだと言っているが・・・糞！立ちやしない！」

全身にビッシヨリ汗を浮かべて荒い息を吐きながら、吐き捨てる様に言った。

「今じゃ唯の小便をするためのホースだ！」

ダラリと撓垂れた自分のモノを見詰めながら自嘲的に呟いた。

そして、自分がこのようなカタワ者になったのはお前のせいだと言わんばかりに、憤怒に燃えた目を未だに意識の無い曉美の方に向けた。

「来い！こっちへ来るんだ！」

怒りにまかせて暁美の長い髪を鷲掴みにすると床に横たわったままの暁美の身体をズルズルと引きずった。

髪の毛を掴まれて引きずられる激痛に暁美の意識が戻った。

アアッー！痛い！助けて！と言う暁美の悲鳴も耳に入らないのか、そのままズルズルと引きずり続けた。

「ほう？こちらは地下^{ダンジョン}牢になっているのか？」

扉を開けた向こう側のまるで西洋の城館の地下牢の様な凝った造作に藤田が驚きの声を上げた。

そして、石を積み重ねた壁に似せた壁面に無数に立てかけられた拷問道具や天上から吊り下がった奇怪な器具に興味深げに目を止めた。

それらは、いわば暁美の商売道具で、これまで無数の客から性の拷問に使用された道具であるが、この不気味な元教師の淫猥な目の色を見ると他の客より恐怖が倍加するのであった。

「アア・・・怖いわ！」

この不気味な雰囲気のを漂わせる元教師を前にして、顔は青ざめ、押さえようとしても身体がガタガタと震え出すのであった。

西洋の地下牢を模した天然石を敷き詰められた床の上まで暁美を引きずって来た藤田は、乱暴に暁美の身体を石畳の上に押し倒した。

そして、飾る様に壁に並べられた、太くて表面に無数の突起が並ぶ直径5センチ近くありそうな巨大な張り型を手にするると瞳に冷酷な光を浮かべた。

藤田の握り締めるその奇怪な女体責めの秘具を目にして暁美がヒッ！と、乾いた悲鳴を上げた。

その淫猥な器具の表面には、まるで^{ゴキブリ}苦瓜の様な大小のイボが無数に表面に飛び出しており、カチッと根元のスイッチを入れると、まるで巨大な芋虫の脚の様にそれらの突起が独立してウネウネと動き始めた。

スクリーンに見入る女達も、その巨大な陰具を自らの秘部に無理矢理挿入される場面を連想したのか、小さく悲鳴を上げてビクッと腰を痙攣させた。

藤田は、短い制服のスカートを捲り上げると、丸出しになった秘部に、ブルブルと振動する

野太いパイプを押し当て、そのまま力尽くで股の間に押し込もうとした。

「ああーっ！嫌！いきなりなんて無理よ！痛いわ！」

通常幾つかの前技により充分その部分を潤して柔らかくした後で無いと入らないような巨大な物を、乾いた部分に無理矢理秘所にねじ込まれてくる秘具の痛みに顔を左右に捻って暁美が泣き叫んだ。

銀子から受けた調教により、何時でも前技無しでも男のモノを受け入れられる身体に肉体改造されていた暁美であったが、不気味な雰囲気のを漂わせる藤田に対して怖気立つ様な恐怖感が先立ち、秘所には潤いは全く無く、その乾いたままの美肉を割ってコジ入れられる陰具に激痛を搔き立てられ悲鳴を上げ続けるのであった。

しかし、藤田の方はそんな暁美の悲鳴に斟酌することなく、逆に泣き叫ぶ美女の身悶える姿に積年の恨みを晴らすかの様に、喜々とした表情を満面に浮かべて、華肉の奥へとグイグイと押し入れるのであった。

突然客として現れた昔の教師に抵抗も出来ないまま、泣き叫び、身体を震わせて身悶えながら、暴虐の性具はメリメリと音を立てる様に秘孔を押し開き、ジワジワと媚肉の奥へと姿を消して行った。

何年か前、暁美の思いがけない激しい反撃を受け、レイプ未遂に終わった事件を思い出すのか、眉間に皺を寄せ、額に汗を浮かべながら、険しい表情になって、グイグイと陰具を埋め込まれて行く股間の様子を血走った目付きで見詰め続けた。

そして、パイプの先端が暁美の胎内の最奥まで達した手応えを感じたのか、あの時叶えられなかった強姦の完遂に心躍らせ、上体を仰け反らせて大きな笑い声を発した。

唯の女子高生と思って油断していたら、荒くれ男達の中で育ち護身用に身に着けた武道で鍛えられたパンチを浴びて、逆にのされるという不覚を演じた苦い経験を味合わされたが、今や滑稽な制服を身に着けたまま、娼婦として客である自分に抵抗も出来ず、苦痛に眉根を寄せる美女を見下ろしながら、快哉の笑いに口の端を歪めるのであった。

「どうだ？お前の様な淫乱な女子校生はこれぐらいの太いモノで無ければ満足出来ないんだろう？」

「イヤ！痛いわ！動かさないで！」

最奥まで突き立てたパイプを握り締めたまま、前後に動かし始めた事により、再び込み上げる激痛に暁美が悲鳴を上げた。

バイブが肉洞から引き出される時には、ピンク色をした肉洞内の粘膜を引きずり出し、押し込む時には周辺の華肉を巻き込んで埋没した。

ヤクザのリンチにより勃起する能力を喪失してしまった自分のモノに代わって、暁美の肉体内に深く埋め込まれたバイブを前後に出し入れする事により、まるで自分のモノを暁美の媚肉に埋込み、強姦しているかのような感激に浸り、次第に激しくピストン運動を繰り返すのであった。

藤田の操作するバイブの動きに悲鳴を上げて身を振らせて苦痛を訴える暁美であったが、何時しか銀子に鍛えられた肉洞が自律的に機能を始めたのか、バイブを巻き込む肉洞からジワジワと潤滑の粘液が滲み出始めていた。

暁美の樹液に濡れて次第に艶々と輝きを増して行くバイブを目にして、藤田がニヤッと口の端を歪めた。

まるで自分のモノを憧れていた女子高生の股間に突き立て、快感の極みに溺れる様なウットリとした表情で、次第に滑りが良くなり始めた筒具を激しく操作し始めた。

「全くお前は淫乱な女子高生だ！こんな大きなモノを嬉しそうに咥え込んで、ジュポジュポとイヤらしい音をさせているじゃないか！」

藤田の指摘する様に今や暁美の秘所は淫液に濡れ、責め具が出入りする度に淫靡な大きな音を立て続けるのであった。

筒具が出入りする度に胎内から掻き出されてくる豊富な愛液の量に藤田はバイブを操作しながら目を瞠った。

「どうだ？良いか？・・・良いと言え！」

額にビッショリと汗を浮かべ、血走った目付きで、激しく責め具を操作しながら喚く様に叫んだ。

握り締めた筒具で深く暁美の股間を抉る度に、温泉地の源泉から湧き出す沸騰した地下水の様に熱い大量の愛液がビュッと噴出し、バイブを操作する藤田の手を濡らし、飛沫となって藤田の顔を濡らした。

そんな暁美の熱い飛沫を顔に受けても、恍惚の表情を浮かべて益々激しくピストン運動を繰り返す元教師の前に、クネクネと身体を震わせてイヤイヤと悲鳴を上げた。

自分の操作する陰具に煽り立てられ、悲鳴を上げて身悶える暁美の姿態を淫靡な目で見詰めながら、逆に暁美の扇情的な涕泣や身震いに煽られる様に一層手の動きを速めるのであった。藤田の妄想の中では、自分の肉塊を暁美の股間に突き立て激しいピストン運動をしている姿

が映っているのであろう。

嫌いぬいていた教師に無理矢理肉体を蹂躪される苦痛からイヤイヤと首を激しく振り続ける
暁美に対して、さあ！イケ！と激しく責め立てる狂った男の姿がスクリーンに映し出されて
いた。

藤田の操作する責め具に煽り上げられ、暁美の思念は完全に喪失した様に見え、苦しそうに
眉根を寄せて、虚空を睨む目の焦点は定まらず、半開きにした口から荒い息を吐き、今にも
絶頂を迎えそうな状態であった。

バイブを突き立てる度にビクビクと痙攣し、甘い吐息を吐き出す暁美の様子から、今にも逝
きそうな状況に在る事を確信した藤田は嵩に掛かった様に激しく責め立てた。

暁美が身体をくねらせ激しい絶頂の声を上げた瞬間、スクリーンを見詰めていた何人もの娼
婦達もつられた様に男達に抱かれる身体を仰げに反らせ、股間から激しく汐を噴き出した。
絶頂を迎えグッタリとした暁美を床に横たえ、未だにヒクヒクと痙攣を続け、女の蜜を滴ら
せる秘裂から乱暴にバイブを抜き取ると、再び自分の身体を開け放たれた暁美の股間の上に
重ねて行った。

「糞！立たない！」

暁美の股間に自分の下半身をあてがいながら、悲鳴の様な叫び声を上げた。

「糞！立たない！立たない！何とかしろ！」

と、暁美に身体を預けたまま、狂った様に大声で涙を流しながら、意識が朦朧とする暁美の
頬を何度も平手打ちにするのだった。

「イヤ！もう許して！」

藤田による激しい被手打ちの嵐の中で苦しそうに暁美が呟いた。

「お前も売春婦だろう！客の何をおっ立てるのが売春婦の役目だろう？」

自分の陰茎が勃起しない苛立たしさを、暁美にぶつける様に怒気を含んで叫んだ。

「お願いします、先生のを咥えさせて下さい！」

藤田の暴力に堪えかねて、銀子から鍛えられた口技により藤田のモノを勃起させようと自ら
哀願した。

「お前は、女子高生のくせに男のモノを咥えるのが好きなのか？何と言う淫乱な女子高生
だ！」

再び女学校の教師時代の妄想が蘇ったのか、淫靡な光を目に宿して舌なめずりをした。

激しい絶頂を経験し全身が腰が痺れた様な疲労感を残したまま、苦しそうに上体を起こすと、藤田の方に顔を向けた。

そして、両手でダラリと股間から垂れ下がったままの肉塊を愛おしげに手にすると、白いしなやかな両手の指先でそれを優しく揉み上げた。

これまで暁美を買った普通の客ならその甘美な手技に魅せられてムクムクと鎌首を擡げるはずであった。

しかし、両手指を使つての娼婦として鍛えられた技巧にも藤田の肉茎は全く反応を示すことは無かった。

次に暁美はそれに愛おしげに何度も頬ずりして、それから口唇を押し当てた。

そして、銀子から教えられた技巧を駆使して、舌先を延ばして、陰茎に備わった性感帯を柔らかに刺激し続けた。

まったく反応を示さない男根であったが、神経はまともに繋がっているようで、暁美の舌がダラリとしたままの男根の神経が集中する部分をなぞる度に、電流が走る様な甘美な刺激が背筋を貫き、藤田の身体がビクッビクッと痙攣した。

ところが、どの様な技術を披露しても、藤田のモノは力無くダラリとしたままであった。

これまで暁美を買った客なら、たちまちこの甘美な技巧に巻き上げられ陰茎を隆々と屹立させたものであったのに。

最後の手段とでも言う様に、硬直する素振りさえ見せない肉塊を口内に招き入れた。

舌全体を駆使して、藤田のモノを扱き上げて、時には柔らかに歯を押し当てたりしても全く硬化する素振りさえ見せなかった。

ただ暁美の巧妙な技巧により藤田が感じているのは確かであった。

暁美の口中で分身を愛撫されながら、感に堪えない様な顔をしてビクンビクンと快感に身体を震わせ続けていた。

一旦は切断された陰茎であるが外科手術により、元の様に神経はつながり、亀頭部に受けた甘美な刺激は脊髄を経由して脳天に継がっている事は間違いのない事実の様で在った。

そして、その快感に支配された脳は、当然男のモノを勃起する様、反射的にホルモンの分泌を促し、陰茎を支配する神経に指令を送っているはずである。

所が、藤田のモノは一向に立ち上がる気配を見せなかった。

男性としての機能を果たさない肉塊が、藤田の肉体と全く分離した存在であるのは明らかであった・・・

藤田としても狂おしく込み上げて来る快感と、その快美感を受け止めても、表に発露する手段が無いことによる狂おしいギャップに責め上げられていることが覗えた。

悔しさを紛らわす様に、床に落ちていたバイブを再び手にすると、思い切り曉美の華肉の狭間に押し込み、自らの肉体による陵辱の代償にしようとした。

野太いバイブを再び咥え込まされ、曉美の身体が一瞬海老の様に反った。

しかし、性具に代償を求め激しく前後に責め立てても、所詮真の快感は得られる筈もなかった。

かつての教え子の絶妙な口技により与えられる怒濤の様な快美感は、痛痒を伴い、唯々体内に蓄積するだけで、それを男性的な力へと変えて外に向かって放出することがどうしても出来ないのだった。

いくら肉体的快感を与えられてもそれを勃起現象という肉体的発露に転嫁できない苦しさは、逆に、曉美の方から快感責めの拷問に遭っている様なもので、意味不明のわめき声を上げて、頭を掻き毟った。

ふと見上げた天上から怪しげな器具が幾つもぶら下がっている事に気付いた藤田は、太い鉄棒を折り曲げ、先端に丸いボール状のモノを溶接した大きな釣り針の様な形をした鉄製の器具に目をやった。

「おい！これは何に使う物だ？」

曉美の作業を中断させた藤田が、その鉄製のフックをぶら下げるロープを弛めて下に降ろすと、その巨大でズッシリと重い器具を手にして淫靡な光を目に宿して曉美に尋ねた。

「それは・・・女の肛門に突き刺して・・・吊り上げる時に使うフックです・・・」

元教師が残忍な目付きでそれを見詰めながら質問するのを、その真意を感じながら恐る恐る答えた。

「ふふ・・・こうするのか？」

藤田が新しい女責めの道具を発見した事に嬉しそうな顔を浮かべて、その先端の直径5センチ近くありそうな鉄製のボールを曉美の後ろの穴に押し付けた。

その僅か前では、半分抜け掛けたバイブがウネウネと気味悪く蠕動運動をしていた。

「アアッ！痛い！」

何時ものことではあるが、客からその大きな球状の物を押し込まれる時は、肛門の周囲の輪状の筋肉が切れそうな程の激痛を感じるのであったが、今日は特にこの不気味な雰囲気醸

し出す元教師により、その部分の緊張も高まっており、苦痛が倍加している様あった。

その部分に潤滑の油脂を塗ることもなく、尻穴の窪みに先端を押し当て柄の部分握って、力尽くでグリグリと押し込むのであった。

「アアッ！イヤイヤ！痛い！止めて！」

後門を貫通される激痛に曉美が手足をばたつかせた。

鋭い悲鳴が上がった刹那、フックの先端の大きなボール状の部分が姿を消した。

肩を上下させてハアハアと荒い息を吐く曉美の汗に塗れた後門の狭間からは太さ3センチ程の鍵形に曲げられた鉄の棒だけが、まるで金属の尻尾の様に姿を見せるだけで、その先端部は完全に直腸の奥に姿を没していた。

鉄の棒を隙間無くキッチリと喰い絞める、繊細な皺を伸ばして大きく広げられた菊花の中心を食い入る様に見詰めていた藤田が舌で唇を嘗めた。

「次はこれを持ち上げれば良いのか？」

天上から垂れ下がるロープを握り締めて、下に引き下ろした。

ロープは天上の滑車を通して曉美の肛門を刺し貫いたフックと結ばれており、ロープがピーンと緊張して曉美の尻を扶る鍵形の鉄棒を垂直に引き立てた。

「アアーッ！イヤイヤ！痛いわ！」

フックにより引き起こされ、下半身から持ち上げられる激痛に曉美が悲鳴を上げた。

そんな曉美の哀願にも斟酌することなく、藤田はロープをグイグイと引き絞り続けた。

まるで太い釣り針に掛かった大魚が海から引き上げられてくる様に、曉美の身体は肛門を頂点として下半身を持ち上げられ、尻を真上に擡げた姿勢となった。

体重を肛腔内に挿入された金属ボールで受け止める形となり、曉美の肛門は歪な形で捲れ上がり、大きく上下に引き延ばされ、フックの下では肛口が開孔し、その赤黒い内部の様子を見せていた。

フックを繋ぐロープを固定し終わると、そのまま藤田は曉美の両手を後ろに捻り上げ、後ろ手錠を掛けて、その手枷にも天上から垂れ下がるロープを括り付けた。

今や曉美の身体は肛門を刺し貫いたフックで腰を宙に吊り上げられ、転倒を防ぐため両脚を大きく広げ、危なっかしい姿勢で立っていた。

「ほら！パイプが落ちそうぞ！」

前の穴から殆どその姿を現し、今にも抜け落ちそうだった責め具を再びグイッと奥まで押し込んだ。

直腸を貫く巨大な鉄製のボールとズブズブと埋め込まれたパイプが薄い隔壁一枚を隔てて擦れ会い、息が止まる様な苦痛を与えた。

「さあ、早く啜えるんだ！お前も売春婦なら客のモノをピンと立たせて見ろ！」

宙吊りになった暁美の下に仰向けになった藤田が、後ろ髪を握り締めて、自分の股間に顔を押し当てた。

肛門を頂点として身体を吊り上げられながら、必死の思いで、顔を下に寝そべる藤田の股間に埋めて、ダラリと下を向いたままの肉片を舌先で愛撫して、そのまま口の中に含んで行った。

暁美の巧みな口技に魅了されて、藤田が快感とも苦痛とも取れない様な表情を浮かべて顔面に皺を寄せた。

それでも藤田の肉片は未だ力を帯びる気配は無かった。

狂おしい快美感を暁美の口内から感じつつ、一向に反応を示さない、肉茎に苛立つ様に訳の分からない叫び声を上げると、

「この糞女！ちゃんと立たせてみろ！」

と、痙攣を起こして、目を白黒させて必死に頬張り続ける暁美の耳元で怒鳴りつけるのであった。

「糞！真面目にやらないとこうだ！」

と、両手を後手に手枷に掛けられ、抵抗出来ない暁美のダラリと垂れ下がった大きな乳房を驚掴みにして、狂った様に揉み上げ、揉み搾った。

「糞！早く立たせないと、こうだ！こうだ！」

と、乳首を捻り上げ、ツンと尖った乳首に爪を立てて、悲鳴を上げさせた。

一向に勃起する気配を見せない事に苛立ち、痙攣を熾して藤田は豊満な乳房を激しく責め立て、股間に埋め込まれたままのパイプで責め苛んだ。

ビクビクと暁美に肉塊を愛撫される度に痙攣するように身体を打ち振るわせる藤田の様子から、相当に快感は体内に蓄積され、男としての肉欲は抑制が効かない程高まっていることは明らかであったが、肝心の股間のモノは男としての機能を果たすことも出来ない様子であった。

一方では激烈な性的快感を受け入れつつもそれを消費できない肉体のため、快感を超えた激越な苦痛と転化して藤田の精神に襲い掛かり、性的刺激を受ければ受けるほど、凄まじい責め苦を与えられている様に感じられた。

「糞！もう良い！」

これ以上暁美の口技を受けることは、逆に暁美から性の拷問を受ける事に等しいと感じて、乱暴に暁美の顔を股間から押し退けた。

ハアハアと肩で息をしながら、恨めしげに暁美の方を睨み付けていたが、少し落ち着きを取り戻したのか、

「おや？少し臭うじゃないか？」

と、呟いた。

暁美の身体を宙吊りにするフックは暁美の肛門を上に向かって押し上げ、肛口は小判形に大きく上下に拡がり、その大きく開いた隙間から腸内に風が吹き込み、腸内の臭いを立ち昇らせているのであった。

鉄製のフックにより大きく上に引き延ばされた肛口とその下の隙間から赤黒い内部を覗かせる排泄口の様子が画面に大写しとなった。

藤田は立ち上がると、^{えぐ}扶られる様に大きく開いた肛口の様子を繁々と見詰めた。

そして、暁美の後部を責め苛んでいた鉄製のフックを引き抜いた。

長時間に渡り、責め続けられた肛門は閉じる機能を失われ、大きく開孔したまま内部の佇まいを見せていた。

ペンライトを手にした藤田が内部を照らしながら、その奥の様子を観察した。

「おや？大分ウンコが降りて来ているようじゃないか？」

ペンライトの明かりで、直腸の奥に姿を見せる褐色の便塊を目敏く見付けて、ニヤッと淫靡な笑いを浮かべた。

「お前の様な美少女でも、糞をするのか？・・どれ、先生に糞をする所を見せて見ろ！」

藤田は手早く次の準備をすると、天上から垂れ下がる二本の鎖をガラガラと降ろして、鎖の端に固定された皮バンドで暁美の脚を縛り付けた。

再び鎖を上を持ち上げると、暁美の身体は大きく両脚を開脚のまま空中に逆さ吊りの姿勢となった。

宙吊りとなった暁美の顔が自分の股間の高さまで来る様に高さを調整した。

暁美の両腕は相変わらず後手に手錠を掛けられたままであった。

暁美の身体を覆っていた、寸法違いのセーラー服を藤田は乱暴に引き裂き、藤田の目の前には一糸纏わぬ暁美の裸身が現れた。

宙に向かって引き拵られた大腿を抱え込み頬ずりをし、暁美の裸身のしっとりとした柔らかな脂肪を載せた肌の感触を楽しむ様に、青白く痩せた身体を押し付けた。

相変わらず力無く垂れ下がる肉片を手で摘むと、暁美の口をこじ開け口内に突き入れた。

暁美も仕方無く、藤田の全身への愛撫を受けながら、柔らかくダラリとしたままの肉片を腔口で愛撫し始めた。

藤田の目の前には、大きく左右に押し開かれた秘所が拵がり、ついさっきまで野太いパイプを咥え込んでいたというのに今はその跡も残さず、清楚な佇まいを見せる柔らかな襞を畳み込んだ秘密の花園が拵がっていた。

その美しく蠱惑的な秘園に虫が吸い寄せられて行く様に、両の指先を使って肉襞を押し分けると、その中心部に顔を埋めていった。

藤田の舌先が自分の秘裂をなぞるのに気付いて、逆さ吊りのままの暁美の身体がビクッと動いた。

そんな暁美の反応を楽しむ様に、休まずに腔口を駆使した愛撫を続けるよう促す様に藤田が腰をグッと押して出た。

舌先で極上の暁美の女の内部を楽しみながら、藤田の手がモゾモゾと動き、天上から垂れ下がったチューブを手にした。

チューブの先にはまるで水槽の様に大きな硝子製のイルリガートルが吊り下げられており、中には5リットル以上在りそうな浣腸液が満々と満たされていた。

裸身を密着させて、暁美の柔らかな身体を楽しみ、舌先では器用に暁美の秘裂を愛撫しながら、自由な両手でチューブをたぐり寄せ、その先端に差し込まれた嘴管を暁美の肛門に突き立てた。

藤田の意図を察知した暁美が恐怖に駆られる様に逆さ吊りの姿勢のまま身体をクネクネと蠢かせたが、それを遮る様に身体を密着させて、股間への愛撫を続けさせながら、嘴管を暁美の直腸の奥へと刺し貫いた。

器用にチューブを手繰りながら、奥へ奥へとしなやかな飴色のゴム製のチューブを送り込み先端から30センチ程が暁美の体内に没した。

充分奥までチューブを押し入れたと確信した藤田が、浣腸液を堰き止めていたコックを弛めた。

冷たい浣腸液が渦を巻いて、暁美の体内に流れ込み始めた。

大腸の奥深くに直接流れ込んで来る浣腸液の圧力を感じて、暁美が苦しそうに逆さ吊りの身

体を身悶えさせたが、両の大腿を押さえ身体を密着させる藤田に動きを封じられた。

逆に、藤田の方から股間を強く押し付けられ、もっと激しく陰肉を刺激する様促された。

腸内を襲う不可感と戦いながら、額に汗を浮かべ必死に腔口による愛撫を続行する暁美の姿があった。

まるで樽の様に大きなイルリガートルの中に貯えられていた、浣腸液は見る見るその水位を下げて行った。

大量の薬液を流し込まれた大腸がまるで風船の様に体内で膨張していった。

浣腸液の流下から10分程経った時、「ふふ・・・まるで妊婦の様じゃ無いか？」と、

大量の浣腸液を流し込まれ、大きく迫り出した腹部を残忍な目で見詰めながら、藤田が呟いた。

股間の愛撫を休んで、妊婦の様に迫り出した腹に耳を押し当てると、ゴーとうなりを上げてゴムチューブの中を駆け下りる薬液の音と、浣腸液に刺激されゴロゴロと蠕動運動を始めた腸内の音が聞こえていた。

「どうした？早く俺様のモノを立てないと、お腹が破裂してしまうぞ！」

「ああ・・・無理よ・・・」

腸内から込み上げる激痛を伴った膨満感に、今にも意識を失いそうになりながら、暁美が呟いた。

「何が無理なもんか？早く勃起させるのだ！」

と、残酷な光を目に宿した藤田は、流量を調節するコックを更に弛め、流下のスピードを速めながら命じた。

張り裂けそうな激痛を感じながら、最早その激痛から逃れる為には、一心不乱に藤田のモノを咥えるしかないと感じた暁美は白目を剥きながら必死の思いで益々激しく力無く垂れ下がる陰茎を愛撫するのであった。

ゴボッと泡の音を立てて、硝子容器の内部に貯えられていた浣腸液は全て姿を失った。

まるで臨月を間近にした妊婦の様に膨らんだ腹を撫で回しながら、まるで蛙の腹の様だと藤田が独り言を言って笑った。

腸内奥深くまで挿管されていたチューブが引き抜かれた。

大腸内を満たす薬液が出口を求める様に、目の前で肛口がピクピクと痙攣していた。

そんな扇情的な痙攣を繰り返す肛口に蓋をする様に、太いゴム製の肛門栓をねじ込んだ。

それは黒くて丸い軟質のゴムの球体三個をまるで串に刺したお団子の様に繋いだ物であった。

それぞれのゴム球の直径は5センチ以上ありそうであり、柔らかなゴムとは云え、肛口の筋肉の抵抗を押し退け、菊花の皺を押し広げ、体内に埋没する度に、引き攣った悲鳴を上げ大腿を痙攣させた。

外部から大きな肛門栓による圧力が浣腸液で荒れ狂う腸内に加わり絶息するな声を上げた。

「さあ、立てるまでウンコはさせて上げないぞ！」

と、苦悶する股間の様子を見詰めながら、笑い声を上げ、叫ぶ様に言い放った。

腸内から襲い来る猛烈な激痛で、目の焦点も失い意識が朦朧として見える暁美は、意志を失った者の様に唯銀子から教え込まれた技術を自律的に発揮するだけの様で、口を窄め、藤田のモノを吸い上げ、舌先を激しく蠢かせていた。

腸内の圧力をもろに受けた肛門栓がピクピクと激しく上下に動き、それに引きずられる様に肛門の周囲の筋肉が盛り上がり収縮したりを繰り返していた。

時々圧力に負けて、栓が抜け出しそうに大きく迫り出すのを目敏く見付けた藤田が、グイッと内部に押し込み、その強い反力が暁美の腸内に激痛をもたらし、グエッと悲鳴が悲鳴の様な呻き声が上がった。

閾値を超越した激痛に脳が混乱を起こしているのか、まるで意味不明の性感を感じている様に、扇の様に左右に大きく開け放たれ、ピクピクと痙攣する大腿の中心の天上に向かって大きく開け放たれた秘園からは、何時の間にか甘美な女の蜜がドクドクと流れ出していた。

そして、これも暁美の口技によりもたらされる快美感の凄まじさに、意識が朦朧とした様に見える藤田が、憑かれた様に股間に唇を押し付け、溢れ出す陰水を喉を鳴らして嚥下していた。

暁美の秘所に口唇を押し当て、今や焦点の定まらない目付きで朦朧とする藤田の眼前では、激しく黒いゴム製の肛門栓が上下に揺れ動いていた。

藤田の股間のモノを咥える暁美も、暁美の股間から溢れ出す、甘い愛液を吸り上げる藤田も全身汗塗れになり、意識を完全に喪失して、ただ何かに憑かれた様に本能のままに舌先を動かしている様子であった。

暁美の肛口を扼する栓の動きが一段と激しくなり、断末摩に近づいていることが明らかとなった。

二人は人間的意志を完全に失い、ただ本能が命ずるままに互いのモノを吸り上げていた。

その時、藤田が、小さな声でオオッと呻き声を上げた。

そして、そのオオッ、オオッという呻き声は次第に大きく成っていった。

暁美の腔内に男根を突き立てたまま、突然身体を大きく仰け反らせ、髪の毛を掻き毟り、絶叫する様な声を張り上げた。

「立った！立ったぞ！」

と、まるで発狂した様な泣き笑いと共に狂おしい呻き声を上げて、ビクビクと腰を痙攣させた。

憑かれた様に必死の思いで頬張る暁美の口内で藤田の男のモノがグングンと大きさを増していく様子が映像を通して窺えた。

大きく伸張した怒張の先端が喉を塞ぎ、思わず暁美が咳き込んだ。

その瞬間暁美の腔内で大きく膨張を遂げた陰茎の先から、溜まりに溜まった夥しい精液を放出した。

そして、それが、引き金となった様に暁美の腸内の圧力が一機に高まり、まるでロケットを発射する様に黒い肛門栓を天上高く打ち上げた。

それに引き続き、まるで地面の奥深くから温泉が吹き上がる様に、夥しい褐色の濁液を真上に噴出した。

天上近くまで吹き上がった排出液は、下降を始め、噴水の様に二人の身体に降り注いだ。

最初の激しい噴射の後も、大量の浣腸液を腸内に注ぎ込まれた暁美の放出は、何時果てるとも無く続き、その度に固形物を含んだ汚濁の液を間欠泉の様に真上に向かって吹き上げた。

いまや藤田の身体は、滝に打たれた様に全身びしょ濡れになり、暁美の身体から噴き出された汚物に塗れ、頭からはドロドロの固形物を含んだ褐色の液が顔面に滴り落ちていた。

ところが、そんな事はまるで気にならないかの様に、あるいは逆に生暖かい濁液の雨に打たれることを快感と感じているかの様に顔全体に笑みを浮かべて、エヘラエヘラ笑い声を上げながら、暁美の腔内に精液の放出を続けていた。

長年溜まりに溜まっていたモノを放出し終わり、暁美の口から凜々しく屹立した陰茎を抜き去った。

画面には大きく勃起したままの太い男根が大写しとなった。

暁美を宙に固定していた足枷を手早く外して、急いで床に横たえると、暁美の体内から噴き出した汚物に塗れたままの身体で、そのまま暁美の上に体を重ねて行き、まだ隆々と硬直した陰茎を秘門にグイグイと挿入して行った。

まだ意識が朦朧としたままの暁美は男のなすがままに身体を開いて行った。

汚物に塗れ褐色に染まった男女が一つに繋がっていた。

藤田が体重を掛けて下腹を突き立てると、暁美の腸内に未だ溜まっている褐色の液がビュッと肛門を割って体外に噴き出した・・・

まるでポンプで体内に溜まった汚濁の液を掻き出す様に、腰を押し込む度に藤田が突き立てる穴の僅か下の穴から不浄の液が何時までも吐出し続けていた。

藤田の狂気を帯びた、泣き叫ぶ様な笑い声と暁美の悲痛な声が何時までも部屋の中に甞していた。

辺り一面糞尿に塗れた床の上で狂ったように抱き合う男女の様子が映し出され、スクリーンから香しい薫りが立ち昇って来るように画面を見つめる男たちは感じた。

そこで、暁美のビデオが終了した。

この凄まじいビデオの幕切れに、再び獣欲を掻き立てられた男達が、宛がわれた売春婦の体を求めた。

選りすぐりのベテランの売春婦といえど、絶倫の男達を相手にして既に最初の交接で体力を使い果していた娼婦達は、泣いて嫌がったが、激しい肉欲に煽られた男達は女達の抵抗を力づくで排除し、前や或いは締まりの喪失した穴を諦め後ろの穴に無理やり肉塊を突き立て己が欲望を満たした。

座敷には娼婦達の悲痛な喘ぎ声^{こだま}が木霊していた。

まるで強姦されるように男から女肉を蹂躪されて、死んだ様に横たわる女達の体から村崎会の幹部連中が離れたのを見計らって、大亜門戸会の三下達が手早く次のビデオに差し替えた。最後に上映されたのは、お竜のビデオであった。

お竜を買った客は、田尻という男で、昔お竜が壺を振る賭場で賭けに負けて全財産を失い、自分が破産したのは、お竜がイカサマをやったためだとお竜を逆恨みして、賭場から出て来るお竜を背後から刺し殺そうとしたが、逆にお竜から返り打ちに合い、騒ぎを聞き付けた目高組の男達に取り押さえられ、シメシを付けるためと左手の小指を詰めさせられた事があった。

男の行方は分からなくなっていたが、お竜に深い恨みを抱いていることは確かな筈であった。その男が今お竜の目の前に客として現れたのだった。

晴江の客といい、暁美の客といい、お竜の客といい、姿を暗ました理由からしてまっとうな

職業に就いているとは思えず、皆粗末な服を身に纏い、お世辞にも豊かな暮らしをしている風は窺えず、女達を抱く高額な支払いが出来るようには見えなかった。

恐らく剛沢がビデオ出演を条件に男達を誘ったものと男達は思った。

元目高組の女達を心底恨む男達を捜し出して来て、その男達に女を宛がい存分に復讐させ、その様子をビデオに克明に収め、苦悶に打ち震える女達の姿を何時でも好きな時に見て溜飲を下げているのだろう。

自分に敵対した者に対する剛沢の容赦無い残酷さを感じる村崎會の男達であった。

「おいおい、お竜姐さんのビデオも良いが、今日の所はこの辺にしておこうぜ・・・」

お竜のビデオが始まった所で、村崎會長の右隣に座る城島という幹部が口を開いた。

「この後で、また晴江姐さん達を可愛がって上げなければならないってのに、このままじゃ大事なもんが空っぽになってしまうぜ・・・」

と、自分の股座を撫でながら言った。

「俺は未だ全然平気だけど相方がこの様じゃな・・・」

と、自分の足許で完全に意識を失ってしまった娼婦の無防備な乳房を指先で突きながら、壊し屋ジョージと異名を取る丈治が笑いながら呟いた。

丈治の足許に死んだ様に倒れ込んだ娼婦は、仰向けの姿勢で両脚をだらしなく大きく広げたままであり、長時間の激しい性交により閉じる機能を喪失してしまった淫部からは何やら男女の愛液が滴り流れていた。

白目を剥いて口から泡を吹いて横たわり、陸に打ち上げられた魚の様に口をパクパクとさせ荒い息を吐いていたが、丈治が足先で股間を押してもはだけたままの乳房を握り締めて捻り上げてても意識を取り戻す様子は無かった。

「女達が熱演する面白いビデオはまだまだ沢山残っているから、このお竜の分は又明日それらと併せて上映と言うことにしましょうか・・・」

剛沢が前に進み出て口を開いた。

「丁度元目高組の姐御連中の準備を整った様だし・・・」

と、襖の向こう側の様子を気にしながら言葉を継いだ。